

福井県埋蔵文化財調査報告 第179集

舟寄本廟遺跡 舟寄築山遺跡

— 北陸新幹線建設事業に伴う調査8 —

2 0 2 2

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第179集

舟寄本廟遺跡 舟寄築山遺跡

— 北陸新幹線建設事業に伴う調査8 —

2022

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、北陸新幹線建設事業に伴って、坂井市丸岡町舟寄において、平成29年度に実施しました舟寄本廟遺跡・舟寄築山遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

舟寄本廟遺跡・舟寄築山遺跡は、兵庫川と田島川に挟まれた場所にあり、互いに南北に隣接しています。本調査地の南西には、かつて姉川の戦いで活躍した朝倉氏の家臣黒坂備中守景久が城主であったと考えられる舟寄館跡が地下に眠っています。

平成28年度に行われた1次調査では、本調査地の範囲内において湿地の中に形成された微高地上に溝や柱穴が掘り込まれている状況が判明しました。

今回、2次調査にあたる本調査によって、13世紀後半から14世紀初め頃の短期間に営まれた集落の存在が明らかになりました。複数の掘立柱建物や井戸、土坑、溝などを検出したほか、特筆する点として、井戸から墨書銘のある曲物が1点出土しました。また、溝の中から中世の土師質皿が一括廃棄された状態で見つかったことが挙げられます。

本書が、今後地域の歴史研究に寄与するとともに、各方面で多くの方々に広く活用されて、埋蔵文化財の理解をより一層深めていただければ誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの方々から多大なご支援とご協力を賜りましたこと、深く御礼申し上げます。

令和4年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 中 川 佳 三

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが北陸新幹線建設事業に伴い、平成29年度に実施した舟寄茶山遺跡・舟寄本廟遺跡(福井県坂井市舟寄所在)の発掘調査報告書である。
- 2 舟寄茶山遺跡・舟寄本廟遺跡の調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、宮崎認(現 福井県立朝倉氏遺跡資料館)、佐々木芽衣、梅澤あゆみが担当した。
- 3 発掘調査の支援業務は、株式会社アコードに委託した。
- 4 発掘調査は、平成29年5月1日から同年9月15日まで実施した。
- 5 本書の執筆・編集は佐々木があたった。第5章第4節は分析を委託した一般社団法人文化財科学研究センターから提出された報告書の一部を佐々木が加筆・編集して掲載した。
- 6 舟寄茶山遺跡・舟寄本廟遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 7 検出遺構・出土遺物の挿図・写真図版作成および遺物の写真撮影は佐々木が行った。遺物整理作業は佐々木、および当センターの整理作業員が行った。
- 8 本書に掲載した遺構図は、株式会社アコードに委託して作成したものを一部改変して使用した。また、上空からの写真は、航空測量時に株式会社アコードが撮影したものである。
- 9 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 10 本書における水平レベルの表示は、海拔(m)を示す。方位は座標北(第2図のみ真北)を用いた。また、X・Y座標値は、国土平面直角座標系VIに基づく。
- 11 本製品の保存処理と樹種同定及び年代測定は一般社団法人文化財科学研究センターに委託した。また、金属製品の保存処理は株式会社イビソクに委託した。
- 12 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 13 発掘調査に際しては、次の方々および機関のご協力を得た。(順不同・敬称略)。
坂井市舟寄地区、坂井市教育委員会、福井県福井土木事務所、福井県総合政策部新幹線建設推進課
- 14 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方からご指導・ご教示を頂いた(敬称略)。
一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川美咲
- 15 発掘調査には、地元の方々のご参加・ご協力を得た。また、整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

第1章	調査の経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	2
第2章	遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	4
第3章	調査の概要	7
第1節	基本層序	7
第2節	遺構の分布	9
第3節	遺物の出土状況	9
第4章	遺構	11
第1節	掘立柱建物	11
第2節	井戸	16
第3節	土坑	21
第4節	溝	24
第5章	遺物	29
第1節	土器	29
第2節	木製品	38
第3節	土製品・石製品・金属製品	41
第4節	木製品の樹種同定及び年代測定	49
第6章	まとめ	51
第1節	掘立柱建物について	51
第2節	遺物について	52
第3節	遺跡について	52

写真図版目次

図版第1	遺跡(1) 調査区 遠景	図版第3	遺構(1) 2区SB5 完掘状況
	(2) 1区 全景		(2) 2区SB6・7 完掘状況
図版第2	遺構(1) 2・3区 全景	図版第4	遺構(1) 1区SB2-P5 土層断面
	(2) 1区SB1 完掘状況		(2) 1区SE1 曲物・越前焼
	(3) 1区SB2 完掘状況		出土状況
	(4) 1区SB3・4 完掘状況		(3) 1区SE1 完掘状況

図版第4	遺構(4)	1区SE2	土層断面上層
	(5)	1区SE2	土層完掘状況
	(6)	1区SE2	土層断面下層
	(7)	1区SE3	土層断面
	(8)	1区SE3	完掘状況
図版第5	遺構(1)	1区SK1	曲物据付状況
	(2)	1区SK1	完掘状況
	(3)	2区SK11・13他	土層断面
	(4)	2区SK11・13他	完掘状況
	(5)	1区SK3	遺物出土状況
	(6)	2区SK6	土層断面
	(7)	2区SK8	土層断面
	(8)	2区SK9・10	土層断面

図版第6	遺構(1)	1区SD1	土層断面
	(2)	1区SD1	完掘状況
	(3)	1区SD4	遺物出土状況
	(4)	1区SD4・5	土層断面
	(5)	2区SD22	遺物出土状況
	(6)	2区SD22	土層断面
	(7)	3区SD41	土層断面

図版第7 遺物

図版第8 遺物

図版第9 遺物

図版第10 遺物

図版第11 遺物

図版第12 遺物

挿 図 目 次

第1図	1・2次調査範囲	1	第18図	1区SD1	25
第2図	福井平野周辺の地形図	3	第19図	1区SD4・5	26
第3図	周辺の遺跡分布図	5	第20図	2区SD18・22・23	27
第4図	舟寄本廟遺跡全体図(1・2区)	8	第21図	3区SD41	28
第5図	舟寄築山遺跡全体図(3区)	9	第22図	SD22出土土師質皿実測図(1)	30
第6図	1～3区土層模式柱状図	9	第23図	SD22出土土師質皿実測図(2)	31
第7図	1区SB1	12	第24図	SD22出土土師質皿実測図(3)	32
第8図	1区SB2	13	第25図	SD22出土土師質皿実測図(4)	33
第9図	1区SB3	14	第26図	SD類・SR1	
第10図	1区SB4	15		出土土器・陶磁器実測図	36
第11図	2区SB5	17	第27図	SE1・SK類・SB類・SX1・包含層・	
第12図	2区SB6	18		カク乱出土土器・陶磁器実測図	37
第13図	2区SB7	19	第28図	出土木製品実測図(1)	39
第14図	1区SE1～3	20	第29図	出土木製品実測図(2)	40
第15図	1区SK1	22	第30図	出土木製品実測図(3)	41
第16図	2区SK11・13・SP409	23	第31図	出土土製品・金属製品・砥石実測図	42
第17図	1区SK3・2区SK6～10	24	第32図	SE2出土墨書曲物	53

表 目 次

第1表	陶磁器観察表	43	第8表	金属製品観察表	49
第2表	土師質皿観察表	43	第9表	樹種同定結果	49
第3表	須恵器観察表	48	第10表	放射性炭素年代測定結果	
第4表	土師器観察表	48		($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	50
第5表	木製品観察表	49	第11表	放射性炭素年代測定結果	
第6表	土製品観察表	49		($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、歴年較正用 ^{14}C 年代、	
第7表	石製品観察表	49		較正年代)	50

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

舟寄本廟遺跡・舟寄築山遺跡は、坂井市丸岡町舟寄に所在し、南北に隣接する（第1図）。調査前の現況は水田地帯である。両遺跡とも周知の埋蔵文化財包蔵地であり、舟寄築山遺跡は古墳時代・中世の遺物散布地（福井県遺跡地図番号13030）として、舟寄本廟遺跡は古墳時代～平安時代の遺物散布地（福井県遺跡地図番号13032）として福井県遺跡地図に登録されている。

北陸新幹線の金沢～敦賀間の延伸は、平成24（2012）年6月に工事実施計画が認可され、同年8月に着工した。これに伴い、平成24（2012）年度以降、事業主体である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道機構）と福井県総合政策部新幹線建設推進課および教育庁生涯学習・文化財課（以下、文化財課）による埋蔵文化財における取り扱いについての協議がおこなわれてきた。

結果、埋蔵文化財包蔵地内において建設工事によって直接的に影響をおよぼす箇所、ならびに恒久的な工作物の設置箇所については、内容把握のための1次調査を実施し、必要に応じて記録保存のための2次調査や工事立会を実施すること、また各調査は鉄道機構が文化財課に委託し、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）が実施することが決定された。

舟寄本廟遺跡・舟寄築山遺跡について、平成28（2016）年10月4日～6日に、県道丸岡川西線舟寄交差点の北側に広がる水田地帯を対象に1次調査を実施した。調査の結果、1次調査範囲の北半部に遺物包含層および溝や土坑、ピット類が掘り込まれた遺構面を確認した。対して南半部は、近隣の集落からの流れ込みと推定される遺物が局所的に出土したものの、長期にわたって低湿地が広がっていたことが明らかになった。以上を受け、1次調査範囲の北半部を対象に2次調査にあたる本発掘調査がおこな



- 遺構・遺物検出調査坑
(2次調査が必要と判断される調査坑)
- 遺物検出調査坑
(表土層から遺物が出土した調査坑を除く)
- 2次調査実施範囲

※基礎地図情報(国土地理院)を基に作成

第1図 1・2次調査範囲（縮尺1/4,000）

われることとなった。対して、1次調査範囲の南半部においては、後日実施した舟寄本廟遺跡の南に隣接する長崎遺跡の1次調査の成果も踏まえ、遺構・遺物の明確な広がりが見られないことから、2次調査の必要はないと判断した。

以上のような経緯のもと、事業地内3,010㎡を対象に、平成29（2017）年5月から9月までのおよそ5箇月間にわたって発掘調査を実施することとなった。本調査の対象範囲は、県道丸岡川西線舟寄交差点の北側、1次調査の北半部（試掘坑No.13～No.23）にあたる（第1図）。

第2節 調査の経過

1 現地調査

調査日誌

平成29年5月12日	現場事務所設置完了。	平成29年6月22日	1区補足調査開始。
平成29年5月15日	1区にて重機を用いた表土掘削を開始。	平成29年6月26日	2区遺構掘削開始。
平成29年5月17日	人力による1区側溝掘削開始。1区表土掘削終了。	平成29年7月3日	1区補足調査終了。
平成29年5月18日	2区表土掘削開始。	平成29年7月6日	3区遺構面精査開始。
平成29年5月19日	2区表土掘削終了。	平成29年7月10日	3区遺構・攪乱掘削開始。
	ベルトコンベア搬入。	平成29年9月1日	2・3区全景撮影。
	1区遺構面精査開始。	平成29年9月6日	舟寄地区を対象とした現地説明会を開催。
平成29年5月22日	1区遺構掘削開始。	平成29年9月7日	補足調査開始。
平成29年5月23日	3区表土掘削。	平成29年9月13日	補足調査終了。
平成29年6月1日	2区側溝掘削開始。	平成29年9月15日	現場作業終了。
平成29年6月15日	3区側溝掘削開始。	平成29年9月19日	撤去作業開始。
平成29年6月20日	1区全景撮影。	平成29年9月21日	出土遺物を現場事務所から搬出。
	2区遺構面精査開始。	平成29年9月26日	プレハブ撤去。現場終了。

2 遺物整理作業

本調査で出土した遺物の量は、応急整理を行った時点でコンテナ14箱である。遺物の整理作業は平成31（2019）年4月から開始し、令和4（2022）年3月までの約2年間にわたり継続して実施した。

本報告書作成に向けた応急整理作業は、平成29（2017）年度1月から着手し、図面、写真の台帳作成をおこなった。委託していた航空測量の成果品は校正の上、同3月に納品が完了した。

平成30（2018）年度は、遺構トレースおよび原稿執筆に着手した。遺物整理作業は、洗浄・注記作業を実施し、年内に完了した。

令和元（2019）年度の遺物整理作業内容は、接合・復元・遺物実測・遺物トレース・遺物写真撮影である。遺物整理作業に並行して遺構トレース、原稿執筆を進めた。3月末までに報告書作成にかかる整理作業を概ね終了した。

令和2（2020）年度は、遺物写真撮影、写真図版の作成、原稿執筆および編集作業を実施した。

以上の作業を経て、令和4（2022）年3月に本報告書の刊行をもって舟寄本廟遺跡・舟寄柴山遺跡の発掘調査を完了した。

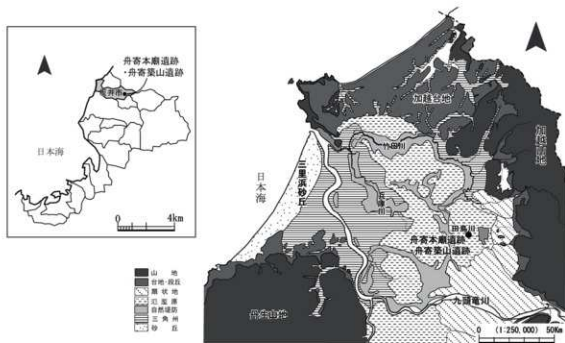
第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境 (第2図)

福井県は、敦賀と今庄の間の山中峠、木ノ芽峠、そして橋ノ木峠をつなぐ山稜を境にして、北部を嶺北地域、嶺南地域と呼び分けられている。嶺北地域北部には三里浜砂丘を経て日本海に面する開けた沖積平野である福井平野が広がる。西側の丹生山地と北側の加越台地、東側の加越山地とに囲まれ、九頭竜川などの諸河川によって埋積された平野である。

縄文時代早期から前期にかけて、福井平野には海面の上昇によって内陸まで海が入り込み、古九頭竜湾と呼ばれる湾が形成された。縄文時代前期には海面が現在より約5m高かったという。縄文中期以降は、徐々に海面が低下し、九頭竜川などが運搬した土砂によって湾が次第に縮小していった。さらに沿岸流によって運ばれた砂が南西方向から角状に延長された砂州を形成し、三里浜砂丘へと発達した。平安時代になると、福井平野の低地と日本海は砂丘で分断され、砂丘より内陸側には排水不良が原因の沼沢湿地が形成された。福井平野へ東から流れ込んだ九頭竜川は、平野西端で日野川等と合流しつつ北へ進路を変え、蛇行しながら日本海へ注ぐ。江戸時代にはそれら河川の築堤と破壊が繰り返される内に、河道が固定化されるようになった。なお、現在の九頭竜川の河道は、明治33(1900)年から11年かけておこなわれた河川改修によって定まったものである。

本調査地は、福井平野北部東よりの福井県坂井町舟寄に所在する。現在、調査地南側を兵庫川が南東から北西方向へと蛇行しながら流れ、調査地北側を小規模な河川である田島川が東西に流れている。田島川はかつて、調査地南側を東西に走る丸岡川西線沿いを、幾筋にも分岐しつつ流れていたと推定される。田島川の氾濫による湛水が生じる頻度は高く、調査地付近は毎年湛水するという。調査地の南西に所在する中世の城館舟寄館跡には現在、盛土がなされた上に工場が建ち、その敷地より南方約2kmの北横地周辺には、旧兵庫川によって形成された自然堤防が広がる。また、調査地の東側及び北西側にも、



第2図 福井平野周辺の地形図 (縮尺1/250,000)

旧田島川によって形成された自然堤防が発達している。

以上のように、氾濫平野の兵庫川と田島川に挟まれた地点に本調査地は位置している。

第2節 歴史的環境 (第3図)

舟寄築山遺跡(1)および舟寄本朝遺跡(2)周辺における遺跡の様相について、時代別に概観する。

旧石器時代 現時点において福井平野では旧石器時代の遺跡は確認されておらず、詳細は不明である。

縄文時代 発掘調査された遺跡としては、舟寄遺跡(31)や若宮遺跡(6)、舟寄福島通遺跡(30)が挙げられる。このうち舟寄遺跡では、平成17(2005)年～平成18(2006)年に県埋文が実施した調査によって、中期中葉後半から後葉前半にかけて短期的に営まれた集落の存在が明らかになった。検出した竪穴建物や掘立柱建物の配置から、環状集落である可能性が指摘されている。主な出土遺物として、翡翠製などの玉類がある。

縄文時代晩期になると集落は北方に移動し、舟寄福島通遺跡や若宮遺跡などで集落が形成される。舟寄福島通遺跡は県埋文が調査をおこない、遺跡の北側で縄文時代晩期中葉に限定される集落が見つかった。若宮遺跡では、縄文時代晩期後葉が主体をなし、土坑・ピット・焼土・土器片の集中域を検出した。

弥生時代 弥生時代中期に舟寄福島通遺跡で、前述した縄文晩期と時期を隔てて集落が営まれた。方形周溝墓2基を検出し墓域の一部であったことが明らかになった。後期に入ると、それまでとはわずかに北側に立地を違えて平地式建物や方形周溝墓などが構えられる。

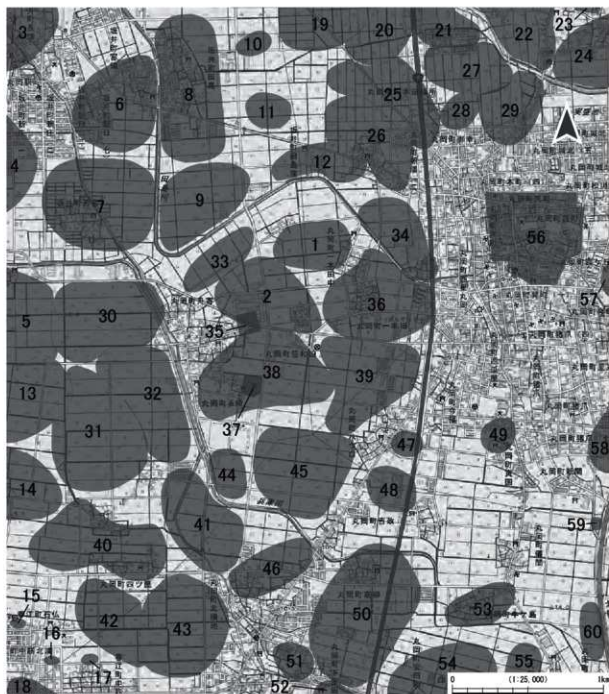
弥生時代後期に入ると、若宮遺跡で集落が営まれる。高柳・下安田遺跡の調査では集落の北東縁辺部の様相が明らかになっており、遺跡の中央付近～南西方向に集落が広がると推定されている。また鋳造の痕跡の検出や、利器として使用された痕跡を残す銅鐔片3片の出土も注目に値する。舟寄福島通遺跡や高柳・下安田遺跡(50)においては、玉生産が行われた。

古墳時代 当該期の資料は少ない。舟寄福島通遺跡で見つかった古墳時代中期から後期にかけての井戸が、当該期としては数少ない例として挙げられる。また若宮遺跡では、古墳時代後期の旧河川の上層で遺物集中廃棄箇所が見つかったほか、後の時期の遺構から子持勾玉片が出土している。北横地森里遺跡(46)では、丸岡町教育委員会による試掘調査の結果、古墳時代後期とみられる遺物が出土している。

奈良・平安時代 若宮遺跡では古代の可能性のある溝等が見つかっており、弥生時代からの集落の継続がうかがわれる。しかし、資料が少なく調査地周辺における古代の集落の具体的な様相は未だ明らかにされていない。

中近世 若宮遺跡では、中世の全時期にわたって210基の井戸が築かれており、村落における「共同水場的」な利用がなされたと考えられている。また本調査地の南方に位置する長崎遺跡(38)は、丸岡町長崎に現存する時宗の寺院、長崎称念寺に伴う集落として注目される。現在の称念寺の寺地は旧北陸道より約400m東に位置しているが、元々は北陸道沿いに立地していたとされる。文明4(1472)年の甲斐・朝倉両氏の合戦の折に攻防の拠点となったことから、朝倉孝景は称念寺の寺地を移動させ、光明院を元の地に置くことを認めた。この時に現在の地に寺地が移った可能性が高い。

本遺跡の南西部には、文明13(1481)年築城の朝倉氏家臣黒坂備中守景久の居館、舟寄城跡(35)が位置している。またそれに関連して、領主黒坂備中守景久が姉川の戦い元亀1(1570)年に出陣する際、領民が領主の武運長久を祈願し踊ったことが起源とされる舟寄踊り(福井県無形民俗文化財)が舟寄地区に伝わる。このほか、幕末の北陸道の石碑も建てられており、当時の様相を今に伝えている。



No. 遺跡番号	遺跡名	No. 遺跡番号	遺跡名	No. 遺跡番号	遺跡名
1 13030	舟寄築山遺跡	16 12045	中筋水久保遺跡	31 13027	舟寄遺跡
2 13032	舟寄本廟遺跡	17 12046	中筋高場遺跡	32 13028	舟寄正堺遺跡
3 11055	長畑・定旨遺跡	18 12048	中筋遺跡	33 13029	舟寄畑地袋遺跡
4 11064	上新庄遺跡	19 13007	宇田遺跡	34 13031	一本田野中遺跡
5 11065	福島遺跡	20 13008	玄女遺跡	35 13033	舟寄城跡
6 11067	宮領遺跡	21 13009	千田遺跡	36 13034	一本田遺跡
7 11068	若宮遺跡	22 13010	長畝西遺跡	37 13035	長崎城跡
8 11069	田島遺跡	23 13011	長畝館跡	38 13036	長崎遺跡
9 11070	田島狐御遺跡	24 13019	女形・長畝遺跡	39 13037	一本田清水ヶ上遺跡
10 11071	宮領京政遺跡	25 13021	福所旧戸遺跡	40 13038	四ツ屋舟寄遺跡
11 11072	田島窪五ヶ遺跡	26 13022	一本田福所遺跡	41 13039	北横地中才遺跡
12 11073	田島窪遺跡	27 13023	福所河田遺跡	42 13040	四ツ屋南遺跡
13 12042	沖布目北遺跡	28 13024	福所大坪遺跡	43 13041	北横地石橋遺跡
14 12043	沖布目遺跡	29 13025	千田鍵田遺跡	44 13042	長崎佐藤栄遺跡
15 12044	石仏遺跡	30 13026	舟寄福島通遺跡	45 13043	ハツ口・吉政遺跡
				46 13044	北横地森里遺跡
				47 13045	ハツ口中樋爪遺跡
				48 13046	ハツ口南平遺跡
				49 13047	寅園遺跡
				50 13048	高柳・下安田遺跡
				51 13049	下安田岸ノ下遺跡
				52 13051	下安田高ノ下遺跡
				53 13053	牛ヶ島遺跡
				54 13054	安田新遺跡
				55 13056	高瀬熊尾遺跡
				56 13062	八ヶ岡城跡
				57 13072	八ヶ岡遺跡
				58 13073	里丸園遺跡
				59 13089	新開安永遺跡
				60 13092	高瀬中部遺跡

第3図 周辺の遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

引用・参考文献

国土地理院 2004 「1:25000土地条件図 福井」

福井県土木管理課 2005 「福井県の土地利用と土地対策」

宮越博輔 1968 「福井平野における水害の研究」『人文地理』20巻2号

建設省近畿地方建設局, 建設省国土地理院 2000 「近畿地方の古地理を訪ねて 近畿地方の古地理に関する調査報告書」

坂井町誌編纂委員長 1973 「坂井町誌」

坂井市教育委員会 2017 「福井県埋蔵文化財調査報告第174集 長崎遺跡-北陸新幹線建設事業に伴う調査3-」

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 「福井県埋蔵文化財調査報告第112集 高柳・下安田遺跡-国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査-」

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 「福井県埋蔵文化財調査報告第120集 舟寄福島通遺跡-国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査-」

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 「福井県埋蔵文化財調査報告第127集 若宮遺跡-九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査-」

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 「福井県埋蔵文化財調査報告第136集 舟寄遺跡-九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査-」

第3章 調査の概要

第1節 基本層序 (第6図)

調査地の現況は水田であり、現地形は北西に向けて緩やかに傾斜している。本調査地周辺は、かつて南東方面から北西方面へと幾筋にも分岐しながら流れていた旧田島川の自然堤防上に位置するとみられるが、近世以降の削平が著しく、現地形は旧地形を踏襲していない。

調査区は、農道を境として南から順に1～3区に分けた。1・2区は舟寄本廟遺跡の範囲内にあたり、3区は舟寄茶山遺跡の範囲内にあたる。このうち3区については、戦後の圃場整備などによる削平が著しい。

基本層序は5層からなる(第6図)。上層より、I層の暗灰黄色粘質土(表土)、II層の暗灰黄色シルト～粘質土(遺物包含層)、III層の黄褐色シルト、IV層のいぶい黄褐色シルト(遺構埋土)、V層の黄褐色シルト(地山)である。

I層の表土は1区にて厚さ20～60cmと比較的厚く、対して2区は厚さ10～30cm、3区は20cm未満と北に進むにつれて薄くなる傾向がある。

I層の下に、土器片を少量含む暗灰黄色シルト～粘質土の遺物包含層(II層)を確認した。調査区西壁土層断面の観察より、遺物包含層は、グリッドNo.B17の落ち込み状の旧地形に差し掛かったところで一度途切れるものの、その他はほぼ全域に堆積しており、厚さは最も薄い地点で約10cm、最も厚い地点で約60cmをはかる。層中から、7世紀～16世紀の遺物が出土した。なお、本調査で検出した近世と考えられる溝1条は、II層上面から掘り込まれたものである。したがって、II層上面に遺構面が存在する可能性があるが、上述の溝以外に遺構は確認できなかった。

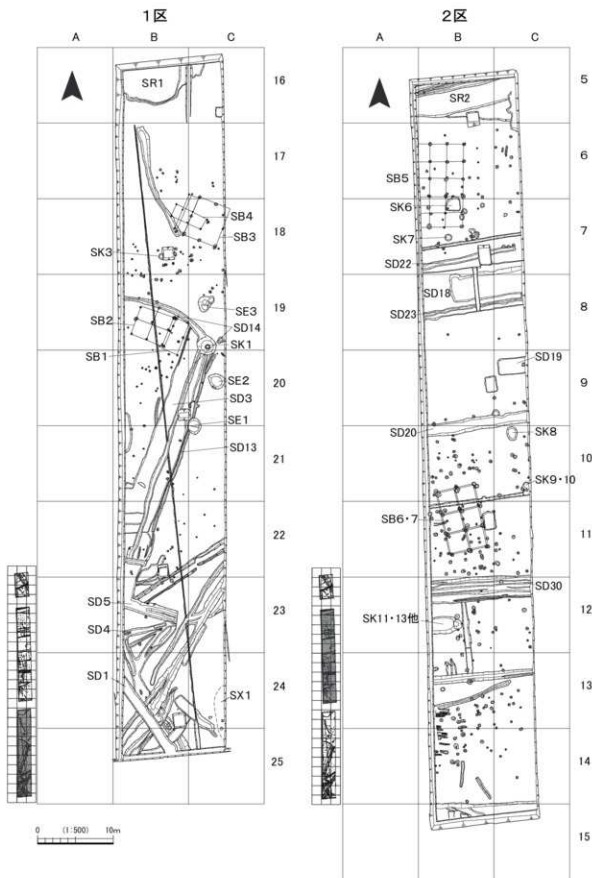
II層の下に黄褐色シルトからなる層(III層)がみられる。調査区内に断続的に存在しており、概ね層厚5～20cmである。この層から遺物は出土していない。

V層は黄褐色シルトからなる地山である。

遺構面は、V層上面で1面確認した。この遺構面に伴う遺構埋土をIV層とし、主にいぶい黄褐色シルトからなる。これらの遺構について、古代に属すると推定される井戸1基を除き、他は13世紀後半～14世紀初頭および15世紀のものである。

調査区全体の旧地形を概観すると、1区から3区の区間の各農道部分については自然河川あるいは落ち込み状地形を呈している。それらを境にして、1区のグリッドNo.17以南と2区のグリッドNo.6付近を中心にV層の地山上面の標高が高くなっており、微高地が形成されていることが読み取れる。調査範囲が狭いため断定はできないが、今回の調査で検出した遺構は、こうした微高地を選んで構築されている可能性がある。また、調査区全体を通して調査区東方に向かってなだらかに傾斜する傾向があることから、集落の中心は調査区よりも西側に展開すると予想される。

調査終了間際に、2区のグリッドNo.Bのラインに沿って南北にトレンチを設定し、下層の確認を行った。その結果、淘汰度の良い青灰色粘質土が厚く堆積しており、そこに遺物を含む混入物は全く確認できなかった。以上から、長期にわたって水成堆積物が安定して供給される環境であったことが読み取れ、周辺における人間の活動の痕跡は一切認められない。



第4図 舟寄本廟遺跡全体図(1・2区)(縮尺1/500)

第2節 遺構の分布 (第4・5図)

検出した主要な遺構は、掘立柱建物 (SB) 7棟、井戸 (SE) 3基、土坑 (SK) 13基、溝 (SD) 41条、ピット (SP) 多数、不明遺構 (SX) 1基、自然流路 (SR) 2条である。

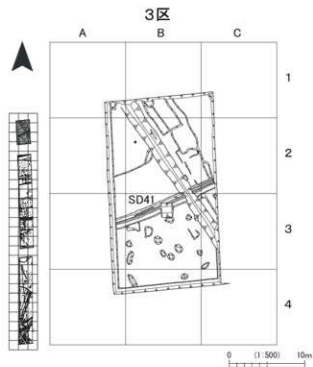
1・2区の舟寄本朝遺跡と3区の舟寄築山遺跡とで遺跡が分かれるが、遺構は1～3区までで通し番号を振った。

遺構の分布は、1区南半部では溝の密度が比較的高く、中央は掘立柱建物数棟や井戸数基などが点在する。古代に属す可能性のある井戸1基も、中央東寄りに位置する (第4図SE2)。

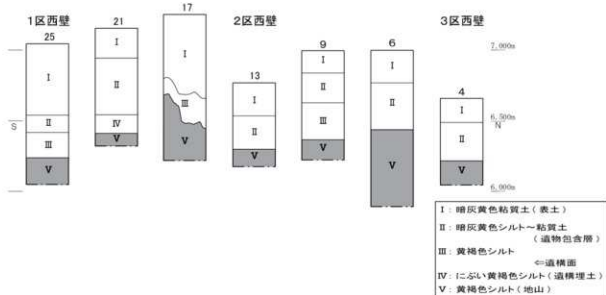
1区の北端と2区の北端では、それぞれ東西方向の自然流路 (第4図SR1・2) の南屑を検出した。

2区は、一部空閑地が認められるものの、1区に比べて遺構密度が高く、遺構の遺存状況も良好であった。本調査内で最も規模の大きい掘立柱建物 (第4図SB5) の傍に土師質皿が一括廃棄された溝 (第4図SD22) が検出されるなど、特殊性がうかがわれる。

舟寄築山遺跡の範囲内である3区においては、カク乱が著しく、検出できた遺構は溝 (第5図SD41) 1条のみであった。出土遺物からは溝の年代は特定できず、また、3区の表土直下の暗灰黄色シルト～粘質土層 (第6図4～II層) からの出土遺物もない。そのため、溝の詳細な時期は不明であるが、3区の遺物包含層と2区の遺物包含層は、土質からみて連続する同一層と考えられる。したがって、包含層直下で検出した溝も、2区の遺構面で検出した遺構と一連の中世前期に属する遺構の可能性がある。



第5図 舟寄築山遺跡全体図 (3区) (縮尺1/500)



第6図 1～3区土層模式柱状図

第3節 遺物の出土状況

遺物はコンテナバットで14箱分出土した。土師質皿が最も多く、その他土師器・須恵器・陶磁器・土師質土器・土製品・金属製品・石製品・木製品および種実などが挙げられる。出土箇所の約9割が遺構、約1割が遺物包含層である。

遺物包含層出土遺物について、グリッドNo.B6～7周辺からの出土量が他と比べて相対的に多い傾向が認められる。また遺構出土遺物について、遺存状況の良い土師質皿は、大半が2区のSD22に一括廃棄された状態で出土している。

木製品は主にSK1・SE1・SE2の3基から出土した。

第4章 遺構

本章では、舟寄本廟遺跡・舟寄築山遺跡両遺跡の主要な遺構について記載する。なお、各遺構から出土した遺物の内容については次章を、各掘立柱建物の時期については6章を参照されたい。

第1節 掘立柱建物

1区SB1 (第7図) 1区のグリッドNo.B19・20に位置する。規模は梁行1間×桁行2間である。主軸は傾きN-72°-Wであり、後述する西隣のSB2や東に隣接する南北溝SD3・14・16などと辺を揃える。柱間寸法は1.8m~2.2mとばらつきがある。各柱穴の平面形状は、概ね径20~30cmの不整形な円形を呈するが、SB1-P7のみ不整形な方形を呈する。柱穴の深度は、SB1-P1のみ30cmと比較的深く、その他は10~20cm前後に取まる。柱穴埋土は、にぶい黄褐色シルトが最も多く、次いで褐色~暗褐色シルト、このほか灰黄褐色シルトなどがみられる。SB1-P1のみ柱痕跡が残っており、柱切取穴埋土が確認できる。柱はすべて抜き取り、もしくは切り取りがなされており、残っていない。今回掘立柱建物として設定したが、東辺の柱軸と西辺の柱軸が若干ずれており、それぞれ単体の柱穴列の可能性もある。

遺物は出土していないが、軸が揃うSD3などと時期を同じくするものと考えられる。

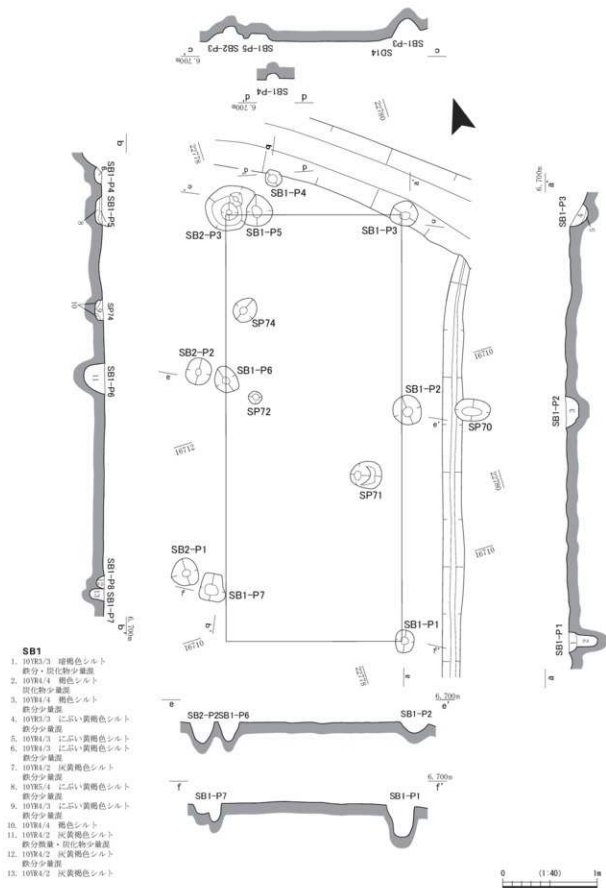
1区SB2 (第8図) 1区のグリッドNo.B19に位置する総柱建物である。規模は2間×2間である。主軸は傾きN-71°-Wであり、SB2と軸を揃える。柱間寸法は概ね2.1mのものが多く、SB2-P8とSB2-P9間が1.6m、SB2-P9とSB2-P6間およびSB2-P6とSB2-P3間が2.4m、SB2-P5とSB2-P2間が2.3m、とばらつきを持つ。柱穴の平面形状は概して不整形で、隅丸方形ないし楕円形を呈する。検出面からの深さは10~20cm程度に取まるものが多い。ただし、SB2-P5のみ検出面から約40cmと深く、唯一柱痕跡を残す。柱はすべて抜き取りあるいは切り取りがなされており、残っていない。

1区SB3 (第9図) 1区のグリッドNo.C17~18・B18に位置する一面庇の総柱建物である。2間×2間の規模を持ち、庇の両側に控えの柱穴が付属する。主軸は傾きN-67°-Wであり、SB4と位置を同じくする。東隅の柱穴は調査区外に位置すると予想され、検出できなかった。柱間寸法は、身舎では梁行さが約2.6m、桁行約2.2mを測る。一方庇部分では身舎よりも幅が狭く、SB3-P9とSB3-P10間が約2.7m、SB3-P10とSB3-P11間が約2.2mである。各柱穴の平面形状をみると、身舎のものでは不整形な楕円形ないし円形を呈しているが、庇にあたるSB3-P9~P11の平面規模は身舎の柱穴のそれに比べて一回り小さい。検出面からの掘削深度は最も深いSB3-P1でも30cmであり、他は10~20cm程度に取まる。

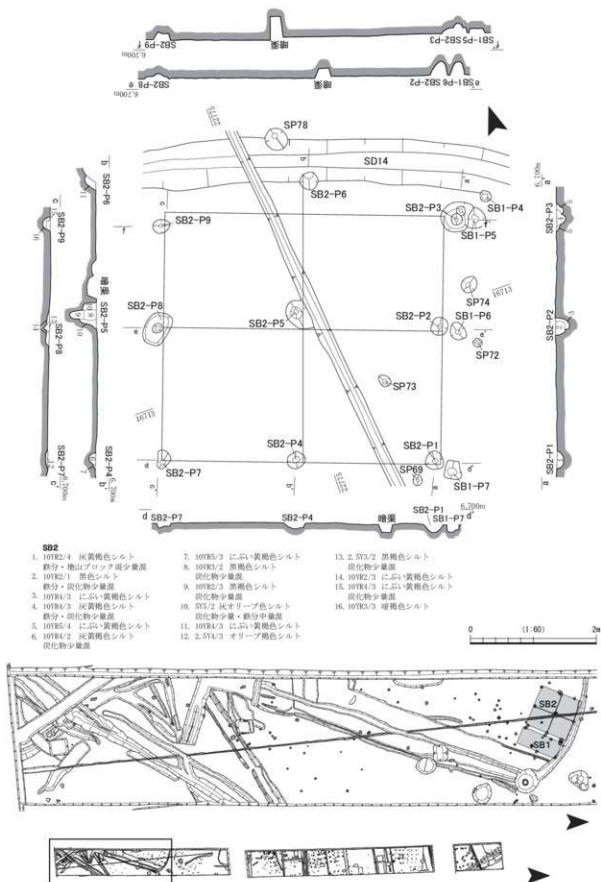
SB3-P10から土師質皿小片が出土している。

1区SB4 (第10図) 1区のグリッドNo.B~C18に位置する。規模は1間×2間の規模を持つ。主軸は傾きN-65°-Wであり、柱間寸法は半側が2.0~2.3m、妻側が1.6~1.7mを測る。柱穴の平面形状はいびつな円形ないし楕円形を呈し、いずれも径10~25cm程度と小型である。掘削深度はいずれも10cm前後に取まる。SB4はSB3と位置を同じくするが、時期の前後関係については不明である。また後世の削平を受けたためか、いずれの柱穴も底部付近のみを検出した結果になった。

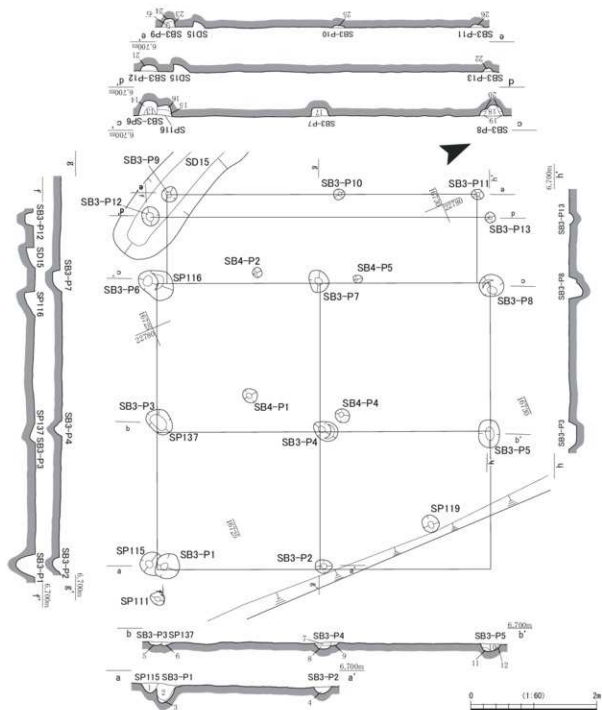
SB4-P4から土師質皿小片が出土している。



第7図 1区SB1 (縮尺1/40)



第8図 1区SB2 (縮尺1/60)

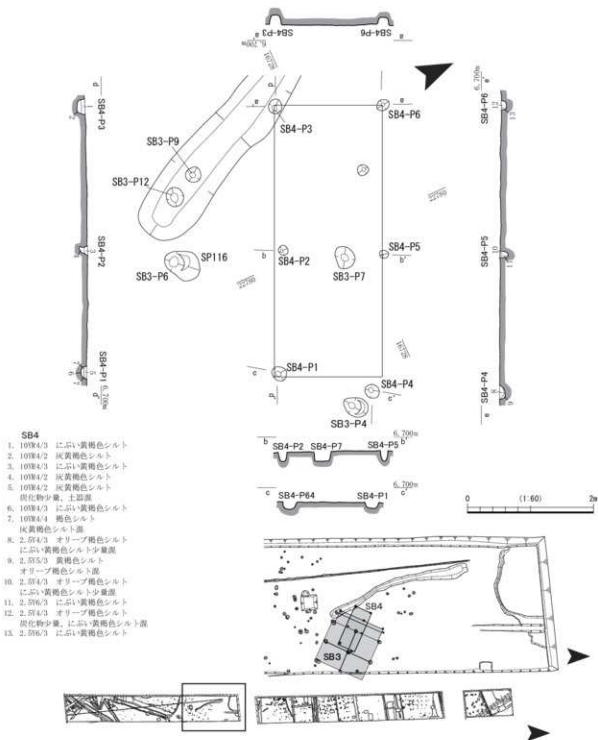


- SB3
- 1. 2. 514/3 オリーブ褐色シルト 炭化物少量混
 - 2. 2. 513/2 黄褐色シルト 炭化物・鉄分少量混
 - 3. 2. 514/4 オリーブ褐色粘質土
 - 4. 10184/4 褐色粘質土 にごい黄褐色粘質土ブロック少量混
 - 5. 2. 515/4 黄褐色シルト 地山ブロック混、SP137
 - 6. 2. 514/4 褐色粘質土 炭化物少量混
 - 7. 2. 514/6 オリーブ褐色シルト 炭化物少量、地山ブロック混
 - 8. 514/3 緑オリーブ色粘質土
 - 9. 2. 515/4 黄褐色粘質土 炭化物少量混
 - 10. 2. 514/4 オリーブ褐色粘質土 炭化物少量混

- 11. 10184/4 にごい黄褐色粘質土 炭化物少量混
- 12. 10185/6 黄褐色粘質土 炭化物少量混
- 13. 2. 514/2 緑灰黄色シルト 炭化物少量混
- 14. 2. 514/3 オリーブ褐色粘質土
- 15. 2. 514/2 緑灰黄色シルト
- 16. 2. 515/4 黄褐色シルト
- 17. 2. 514/2 緑灰黄色粘質土 炭化物少量、地山ブロック混
- 18. 2. 514/3 オリーブ褐色粘質土 炭化物・鉄分少量混
- 19. 2. 515/4 黄褐色粘質土 炭化物少量、地山ブロック混

- 20. 2. 513/3 緑オリーブ褐色粘質土 炭化物少量混
- 21. 10184/4 褐色粘質土 炭化物少量混
- 22. 2. 514/4 オリーブ褐色シルト 炭化物少量混
- 23. 2. 514/3 オリーブ褐色シルト 炭化物少量、地山ブロック混
- 24. 2. 514/3 オリーブ褐色シルト 炭化物少量混
- 25. 2. 515/6 黄褐色シルト 炭化物少量混
- 26. 2. 514/3 オリーブ褐色粘質土 炭化物少量混

第9図 1区SB3 (縮尺1/60)



第10図 1区SB4 (縮尺1/60)

2区SB5 (第11図) 2区のグリッドNo.B6~7に位置する束柱式の総柱建物である。規模は2間以上×5間である。主軸は傾きN-179°-Wである。東側はさらに調査区外に延長する。本調査において検出した掘立柱建物の中で最も大きい規模を持つ。柱間寸法は約2.2mだが、南辺の南北一間のみ約1.8mとやや短い。平面形状はいずれも不整形な円形ないし楕円形を呈し、径30~70cm程度の規模を持つ。柱穴の深さは、20~40cm前後である。側柱に比べて屋内柱の柱穴の規模がやや小さいことから、束柱であったと推測する。柱穴埋土はにぶい黄褐色シルトあるいは暗褐色シルトなどである。柱痕跡な

どは認められない。また抜き取りがなされたためか、柱根も残っていない。

後述するSK6が建物内の南東部に位置しており、SB5に付随する遺構であると考えられる。

出土遺物は、須恵器・土師質皿小片・青磁が出土している。

2区SB6・7 (第12・13図) グリッドNo.B10～11に位置する総柱建物である。規模はいずれも3間×2間であり、主軸は傾きN-11°-Wである。建物は一度、同一地点に同一規模での建て替えが行われており、建て替え前をSB7、建て替え後をSB6と呼称する。柱間寸法は2.6mであり、SB7の上屋を撤去後、各柱穴のすぐ南西に隣接して柱穴の掘り直しを行っている。柱穴の平面形状は不整形な隅丸方形ないし円形・楕円形を呈する。規模は径20cm～70cm前後とばらつきがある。柱穴埋土にはぶい黄褐色シルトや灰黄褐色シルトである。柱痕跡が認められるものは、SB7-P1、SB6-P2、SB6-P7、SB6-P6であり、その内SB7-P1およびSB6-P2については、柱切取穴埋土が確認できる。すべての柱穴について、柱は抜き取りあるいは切り取りがなされており、柱根は残っていない。

出土遺物については、SB6-P1・2およびSB7-P4・7から土師質皿小片が出土している。このうちSB6-P1出土のものは灯明皿である。

出土遺物が少なく小片のため、建て替えの時期差など詳細については不明である。

第2節 井戸

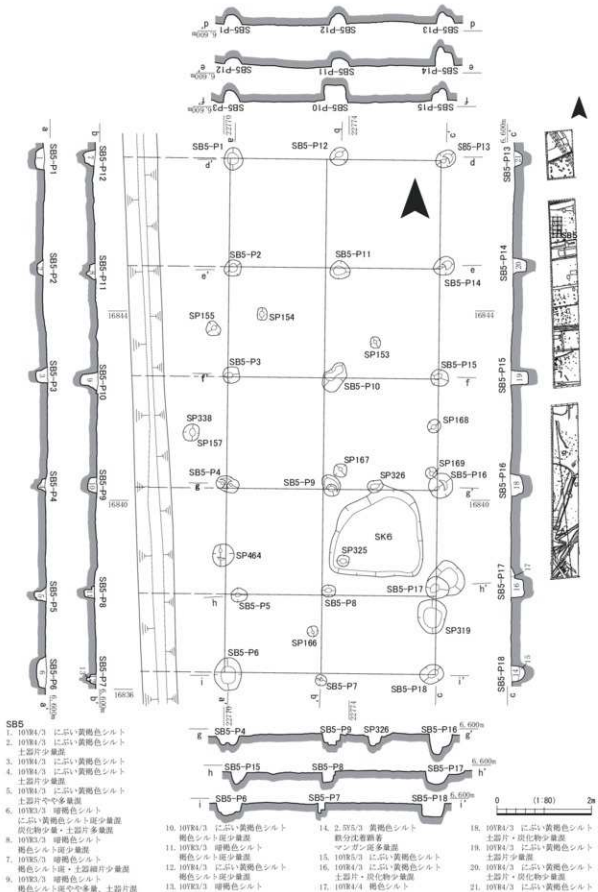
1区SE1 (第14図) グリッドNo.C20・21に位置する素掘りの井戸である。検出面の平面形状は不整形な楕円形をなし、長径約2.6m、短径約1.8m、深さ約3.0m、底部径約1.3mの規模を持つ。土層断面から、一度掘り直しが行われたことがみてとれる。最下層では、細砂混じり灰オリーブ粘質土、黒色粘質土と暗オリーブ灰色粘質土の互層状堆積が観察された。これは井戸機能時の堆積状況を示す。最下層の直上には曲物底板のほか人頭台円礫・炭を多量に含む腐植土と灰色粘質土の互層状堆積が東よりに堆積している。このことから、井戸が廃絶した後、廃棄土坑として機能していたことがうかがえる。その上層は地山ブロックを含む黄灰色あるいは暗オリーブ灰色の粘質土などで水平に埋め立てられる。その後、直径60cmほどの規模で断面形状が逆台形状の土坑が掘削され、最後にこの土坑が黄灰色粘質土～シルトで埋め立てられている。1～11層土より、土師器(甕)・須恵器(甕)・土師質皿小片・瓦質土器・越前焼(播鉢・甕)・曲物底板・附木・木札・板材・桃核などが出土した。

12層以深では出土遺物が確認できず、井戸機能時の時期は不明である。井戸の廃絶時期は、13世紀末～14世紀初頭頃と考えられる。

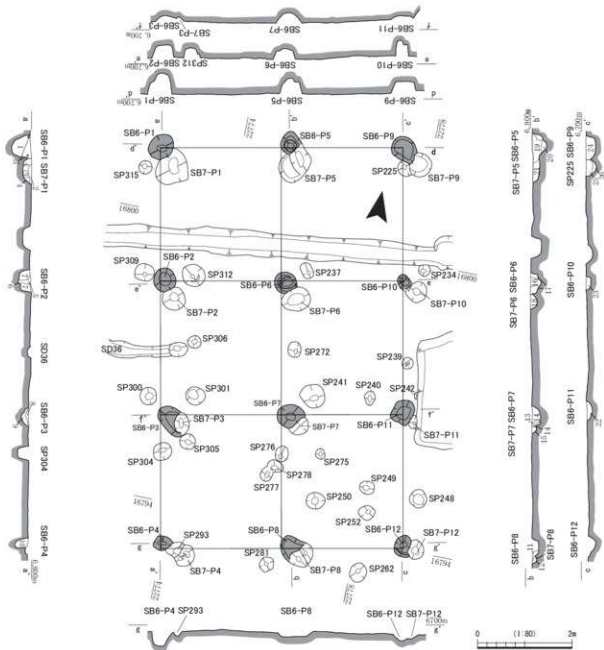
1区SE2 (第14図) グリッドNo.C20に位置する素掘りの井戸である。検出面の平面形状は不整形な円形を呈しており、長径約3.0m、短径約2.0m、深さ約2.9m、底部径約1.0mの規模を持つ。SE1と同様に一度掘り直しがなされている状況が土層断面より観察できる。最下層に、灰オリーブ色細粒砂が厚さ10cmほど溜まり、オリーブ黒色粘質土と灰オリーブ色粘質土が交互に緩やかなレンズ状堆積をなす。

赤彩暗文土師器(杯C)・土師器小片・須恵器・土師質皿小片多数・曲物(底板(片面墨書有)・蓋)が出土している。時期は8世紀～9世紀に属す可能性がある。

1区SE3 (第14図) グリッドNo.C19に位置する素掘りの井戸である。検出面の平面形状は歪な隅丸の三角形を呈しており、長径約2.5m、短径約2.3m、深さ約1.6m、底部径約0.6mの規模を持つ。南側と東側に深さ0.6mの段を持つ。土層断面より、前述の段の高さまで一度掘り下げた後に埋め立て、次に北側を深さ1.6mの深さまで掘り下げて、井戸として利用したのちに埋め立てたことが伺える。1・



第11図 2区SB5 (縮尺1/80)

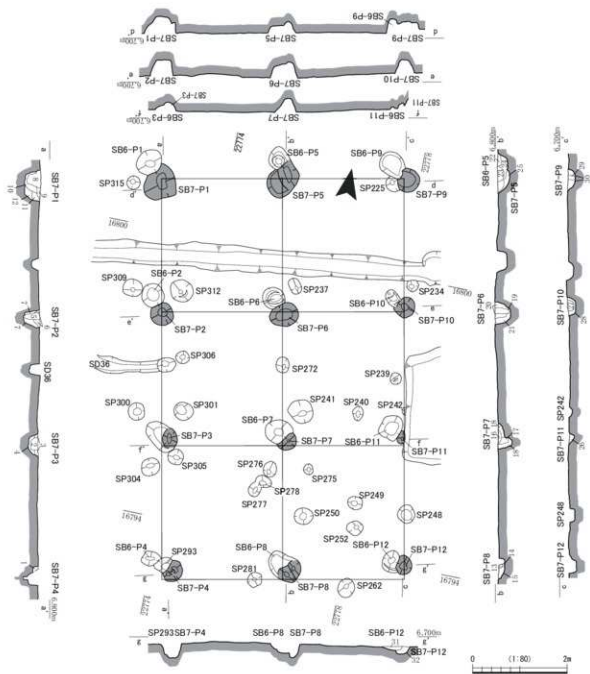


SB6

1. 10YR/3 に近い黄褐色シルト
マンガン被覆層
2. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト面少量混
3. 10YR/2 灰黄褐色シルト
4. 10YR/3 に近い黄褐色シルト
5. 10YR/3 に近い黄褐色シルト
炭化物・焼土や少量混
6. 10YR/3 に近い黄褐色シルト
7. 10YR/3 に近い黄褐色シルト
8. 10YR/2 灰黄褐色シルト
炭化物少量混
9. 10YR/3 に近い黄褐色シルト
下部に近しい黄褐色シルト
10. 10YR/3 に近い黄褐色シルト
下方に近しい黄褐色シルト面少量混
11. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト多量混
12. 2. 5Y5/4 黄褐色粘質土
暗灰黄色シルトブロック少量混
鉄分多量混
13. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト中量混
14. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト面少量混
15. 10YR/3 に近しい黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト混・炭化物少量混
16. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト面少量混
17. 10YR/2 灰黄褐色シルト
下部に近しい黄褐色シルト多量混
18. 2. 5Y5/2 暗灰黄色シルト
に近しい黄褐色シルト面少量混
19. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト面少量混
20. 2. 5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト
21. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト多量混
22. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト多量混
23. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト多量混
炭化物少量混
24. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト面少量混
25. 10YR/2 灰黄褐色シルト
に近しい黄褐色シルト多量混
26. 2. 5Y4/3 オリーブ褐色粘細砂

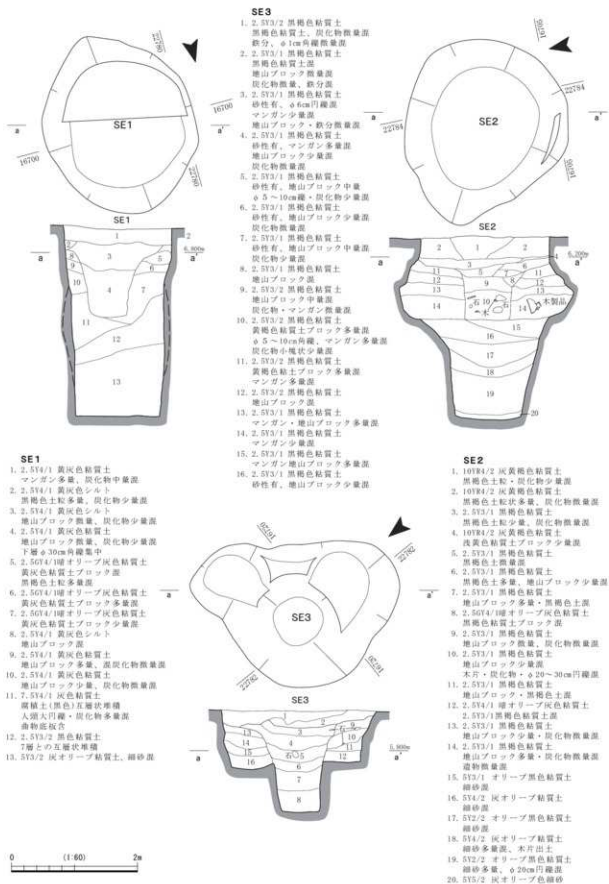


第12図 2区SB6 (縮尺1/80)



- SB7**
1. 2.016/3 黄褐色シルト
 2. 016/3 灰黄色シルトブロック状凝縮
 3. 10184/3 に近い黄褐色シルト
 4. 2.014/2 暗灰黄色シルト
 5. 2.014/3 オリーブ褐色粘質土
 6. 暗灰黄色シルトブロック状凝縮
 7. 2.014/2 暗灰黄色シルト
 8. 炭化物微量、黄褐色シルトブロック状凝縮
 9. マンガン混沈着
 10. 2.014/2 暗灰黄色シルト
 11. マンガン混沈着
 12. 2.014/4 オリーブ褐色粘質土
 13. 暗灰黄色シルト多量、炭化物微量
 14. 10184/3 に近い黄褐色シルト
 15. 黄褐色粘質土多量、炭化物少量
 16. 2.015/3 黄褐色粘質土
 17. 鉄分多
 18. 2.015/3 に近い黄褐色シルト
 19. 黄褐色粘質土ブロック少量、鉄分多
 20. 2.015/6 黄褐色シルト
 21. 10184/3に近い黄褐色シルトブロック多量
 22. 10184/3 に近い黄褐色粘質土
 23. 炭化物微量、黄褐色シルト混沈少量
 24. 10184/3 に近い黄褐色シルト
 25. 黄褐色シルトブロック多量、炭化物少量
 26. 10184/3 に近い黄褐色シルト
 27. 黄褐色粘質土ブロック少量
 28. 2.014/2 暗灰黄色シルト
 29. 黄褐色シルト
 30. 2.014/2 暗灰黄色シルト
 31. オリーブ褐色粘質土
 32. 暗灰黄色シルト
 33. 黄褐色シルト
 34. 黄褐色粘質土
 35. マンガン少量
 36. 10184/2 灰黄色シルト
 37. に近い黄褐色シルト多量
 38. 10184/2 灰黄色シルト
 39. に近い黄褐色シルト多量
 40. 10185/3 に近い黄褐色シルト
 41. 灰黄色シルト混沈少量
 42. 10185/3 に近い黄褐色シルト
 43. 黄褐色粘質土ブロック少量、炭化物少量
 44. 2.012/3 暗オリーブ褐色シルト
 45. 軟弱、黄褐色シルトブロック、炭化物少量
 46. 10184/2 灰黄色シルト
 47. 灰黄色粘質土ブロック微量

第13図 2区SB7 (縮尺1/80)



第14図 1区SE1～3 (縮尺1/60)

2層を除いて全層に地山ブロックまたは黄褐色粘質土ブロックが含まれることから堆積層は全て埋め立てて構成されるとみられる。

出土遺物としては、土師器小片・土師質皿片がある。

遺構の所属時期は不明である。

第3節 土坑

1区SK1 (第15図) グリッドNo.C19・20に位置する水溜槽である。径約2.4m、深さ約1.6mを測り、中心に曲物の側板が4段分据え付けられている。水溜槽の掘方は、平面形状が不整形な径約50cmの底部に向かってすり鉢状に掘り込まれている。側板の沈下を防ぐために、側板を1・2段据え付けて周囲を埋め立てるごとに、側板の上面を開くように木製の板材が六角形に敷き並べられる。残っていたのは井戸底部から4段分の側板のみであり、それより上の側板は抜き取られ残っていない。1層は曲物側板の抜き取り穴であり、曲物側板内部の堆積が2・3層と続く。掘方の埋土は上位の5～6層までブロック土を少量含む黒褐色または灰黄褐色の粘質土であるが、下層の9層～13層はブロック土を含まないオリブ黒色粘質土や黒褐色シルトが互層する。SK1の北西側はSD14に、南側はSD3・13・14に接続する。

出土遺物には、土師器（高杯脚）・須恵器・土師質皿・灰軸陶器・白磁・青磁塊・鉄釘・砥石・折敷・板状木製品・ヘラ状木製品・曲物側板（井戸側）などがある。

遺構の所属時期は、13世紀末～14世紀初頭頃と推定される。

2区SK11・13・SP409 (第16図) SK11はグリッドNo.B12に位置する水溜槽である。長径約2.5m以上、短径約2.3m、深さ約1.2mをはかる、平面形状が船底状の土坑である。土層断面から、3層の厚さ50cm前後のふい黄褐色シルト層と、それ以深の層とに大きく分けられる。6層のオリブ黒色粘質シルトより下層は還元色を呈しており、水成堆積である。SK11の東側はSP409と地震によって吹き上げられた噴砂によって断絶している。またSK13の西側を切っている。形成の順序としては、SK13→SK11→SP409→噴砂となる。SK13はSK11に切られる径1.2m以上、深さ約0.8mの平面形状が円形の土坑である。SK13とSK11を切るSP409は、径0.39m、深さ0.33mのピットである。ピットの埋土は、地震により吹き上げられた噴砂に西側を貫かれている。

出土遺物には、須恵器・土師質皿・白磁・青磁・砥石がある。

SK11の所属時期は、13世紀末～14世紀初頭頃と考えられる。

1区SK3 (第17図) 1区のグリッドNo.B18に位置する。長径0.8m、短径0.6m以上、深さ0.3mの規模を持つ土坑である。平面形状は不整形な円形を呈し、東側3分の1は試掘坑に切られており残っていない。土坑埋土は上層の炭混じり黒褐色シルトと下層の暗褐色シルトからなり、下層からは土師質皿が2個体出土した。

所属時期は、13世紀後半頃と推定される。

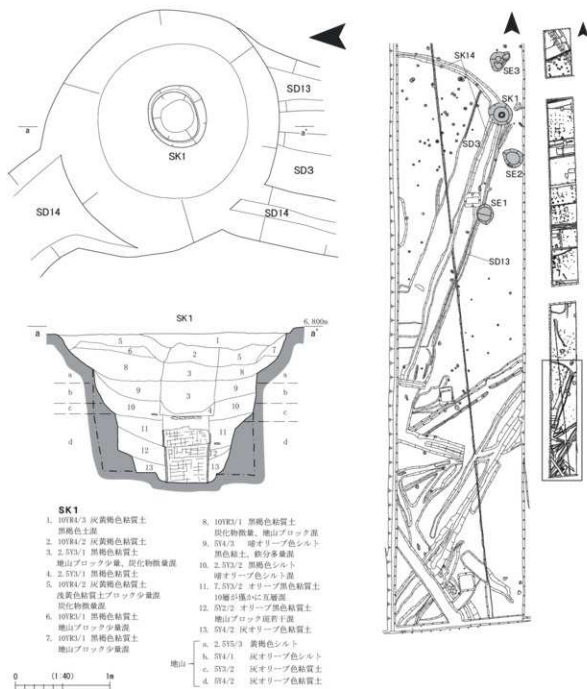
2区SK6 (第17図) 2区のグリッドNo.B6・7に位置する。長径2.0m、短径1.9m、深さ0.2mの規模を持つ、平面形状が不整形な隅丸方形の土坑である。埋土について、1層は暗褐色シルトが4～8cmの厚さで概ね水平に堆積し、層中には土師質皿片と褐色シルトを多量に含む。2層～4層には暗褐色シルトブロックを少量含む褐色シルト土層がほぼ水平に堆積する。前述したSB5内に位置しており、建物に付随する施設であった可能性が考えられる。出土遺物には、土師質皿がある。

2区SK7 (第17図) 2区のグリッドNo.B7、前述したSB5のすぐ南側に位置している。規模は長径約1.0m、短径約0.9m、深さ約0.3mである。平面形状は円形を呈する土坑である。埋土は2層に分かれており、いずれも緩やかなレンズ状堆積をなす。

出土遺物には、土師質皿がある。遺構の時期は不明である。

2区SK8 (第17図) 2区のグリッドNo.C10に位置する。長径約1.8m、短径約1.4m、深さ約0.16mの規模を持つ。平面形状が不整形な楕円形を呈する土坑である。埋土は黄褐色シルトであり、歪なレンズ状堆積をなす。

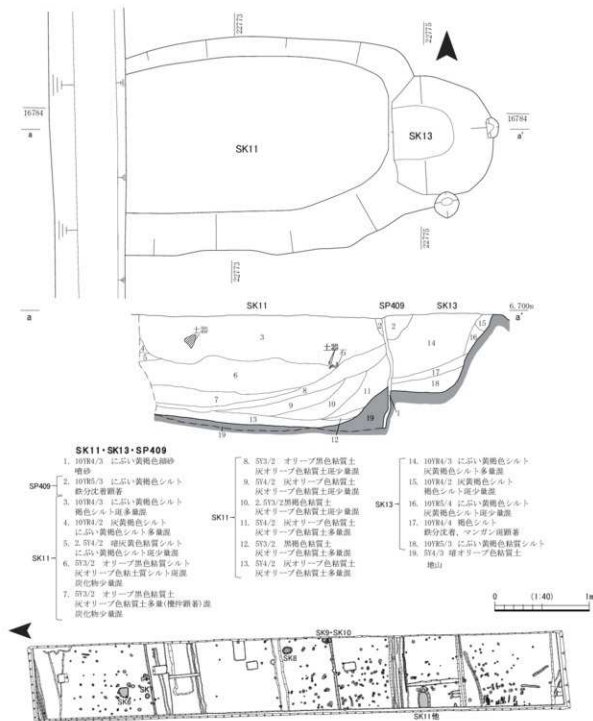
遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。



第15図 1区SK1 (縮尺1/40)

2区SK9・10 (第17図) 2区のグリッドNo.C10に位置する。SK9は、長径約0.9m以上、短径約0.8m、深さ約0.23mの規模を持ち、SK10は長径約0.9m、短径0.8m以上、深さ約0.2mの規模を持つ。いずれの土坑も東側は調査区外へと延長する。SK9・10両土坑とも平面形状は不整形な隅丸方形を呈す。SK10がその西側に位置するSK9を切っており、埋土は両土坑とも3層からなる。

出土遺物には、土師質皿がある。所属時期は不明である。

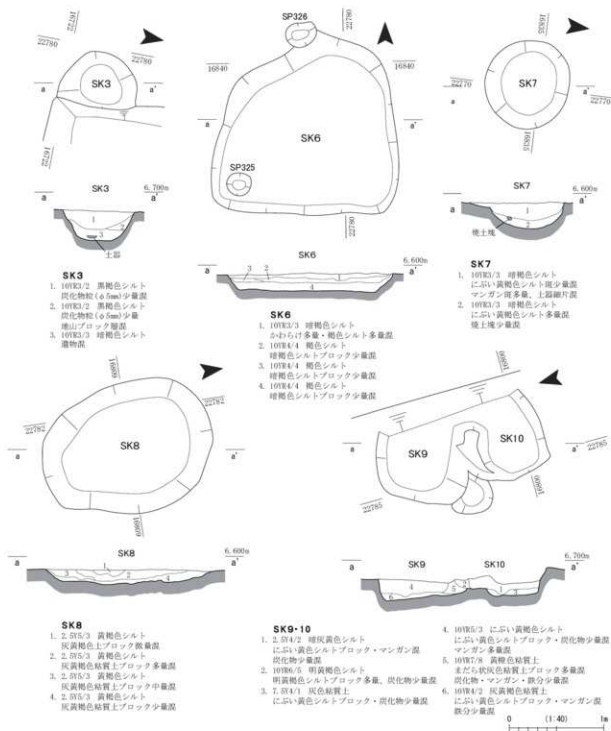


第16図 2区SK11・SK13・SP409 (縮尺1/40)

第4節 溝

1区SD1 (第18図) 1区のグリッドNo.B24・B25に位置する。規模は長さ約124m、幅約1.3m、深さ約0.2mである。N-36°-Wの傾きを持ち、ごく緩やかな傾斜を持つ溝である。遺構検出面よりも上層から掘り込まれた溝であり、SD4・SD2・SD9・SD10を切る。埋土は4層である。2段階に分けて堆積しており、上層の1・2層については一度掘り直しが行われた以降の堆積と考えられる。遺物は、須恵器(杯)・土師質皿・瓦質土器・越前焼(甕・播鉢)が出土している。

所属時期は15世紀頃と推定される。



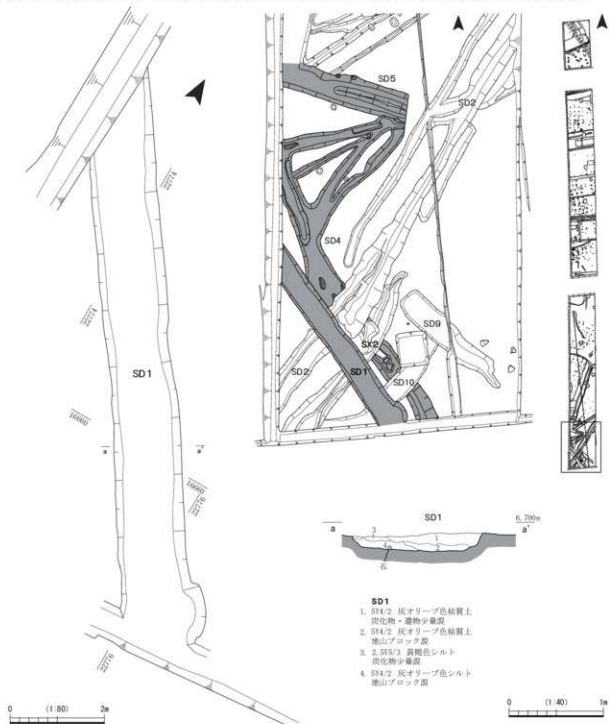
第17図 1区SK3・2区SK6-10 (縮尺1/40)

1区SD4 (第19図) 1区のグリッドNo.B23・B24に位置する。SD4は、 $N-31^{\circ}-W$ の傾きで緩やかな傾斜をもちながらおよそ15.8m延び、調査区西壁に差し掛かる付近で屈曲し、分岐しながら東北東へおよそ8.0m延びる溝である。幅は約2.8m、深さ約0.3mを測る。

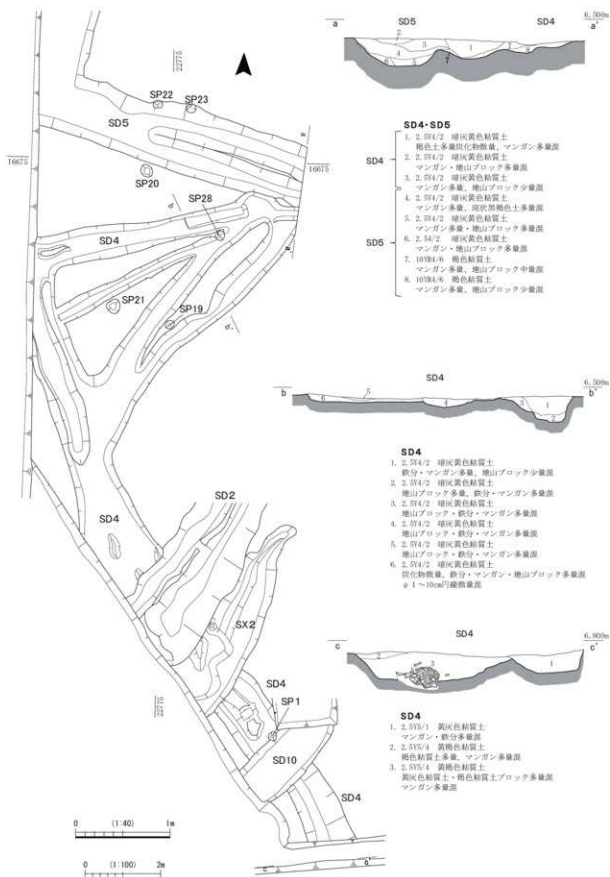
調査区南端部のSD4底部より、土師器の長胴甕および須恵器の有蓋高杯が出土した。そのほか、土師質皿小片・瓦質土器・越前焼(燗)が出土した。

所属時期は不明である。

1区SD5 (第19図) SD5は傾き $N-74^{\circ}-W$ であり、SD4の北側を東南東へ傾斜しながら直進する溝であり、長さ約7.6m、幅約2.3m、深さ約0.3mを測る。調査区東西中央付近にてSD4に切られる。

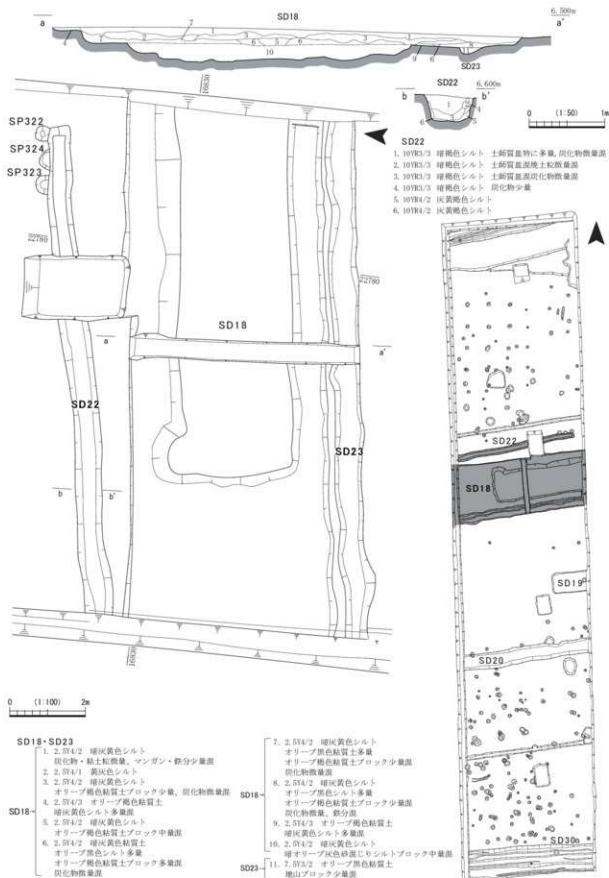


第18図 1区SD1 (平面:縮尺1/80・断面:縮尺1/40)



第19図 1区SD4・5 (平面:縮尺1/100・断面:縮尺1/40)

第4節 溝



第20図 2区SD18・22・23 (平面:縮尺1/100・断面:縮尺1/50)

出土遺物は、土師質皿・瓦質土器・越前焼・白磁碗（13世紀後半頃）である。

2区SD18・23（第20図） 2区のグリッドNo.B7～8・C7～8に位置する。SD18の規模は長さ約13.1m、幅約6.2m、深さ約0.5mである。傾きN-99°-Wであり、東南東への傾斜を持つ溝である。SD18内の南寄りに並行してSD23が幅約0.3m、長さ約13.2mの規模でSD18直下を走る。

出土遺物は、土師器・須恵器・土師質皿・瓦質土器・越前焼・青磁・染付・紅皿である。

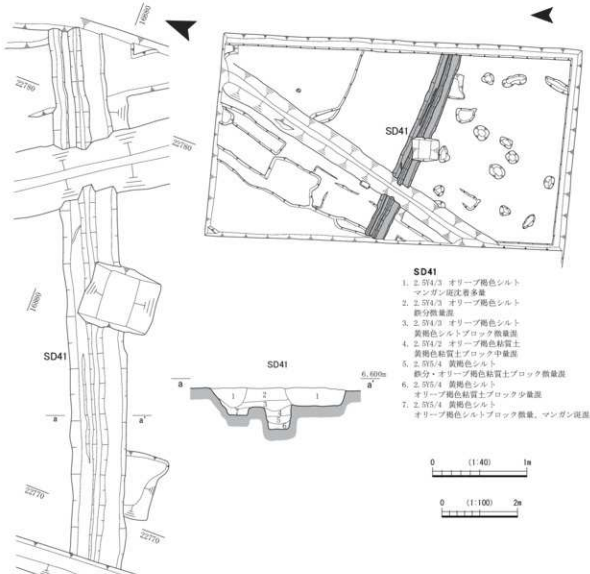
所属時期は近世に属すと考えられる。

2区SD22（第20図） 2区のグリッドNo.B～C7に位置する。傾きN-102°-Wであり、規模は長さ約12.5m、幅約0.6m、深さ約35cmを測る。多量の土師質皿がほぼ一括廃棄された状況で出土した。

出土遺物は、土師質皿・土鍋・片口鉢（東海系瓷器か）・同安窯系青磁皿である。

3区SD41（第21図） 3区のグリッドNo.B～C2・A～B3に位置する。長さ14.1m、幅1.4m、深さ約0.4mの規模を持つ。傾きN-67°-Wで、ほぼ水平に走る溝である。それぞれ両端部は調査区外へと延びる。数度掘り直された痕跡があり、土層断面記録付近では、北側と中央で2段階にわたり、断面形状が逆台形状の落ち込みを呈する。周辺はカク乱で覆われており、性格は不明である。

出土遺物は、土師質皿小片、越前焼小片が出土している。所属時期は不明である。



第21図 3区SD41（平面：縮尺1/100・断面：縮尺1/40）

第5章 遺物

出土遺物としては、土師質皿が最も多く、その他に須恵器、土師器、青磁、越前焼、土製品、石製品、木製品などがある。これら遺物の時期の多くは13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。

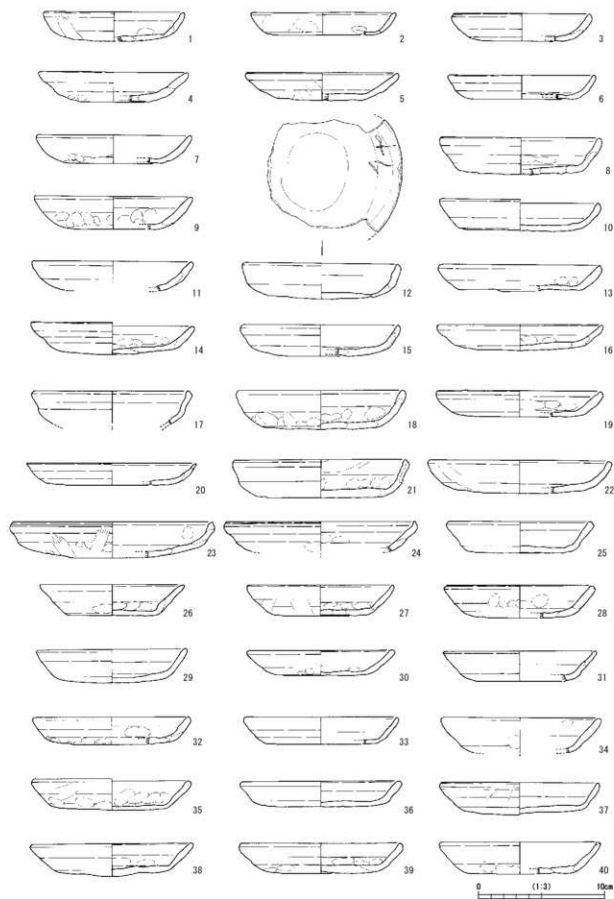
第1節 土器

1 遺構出土土器

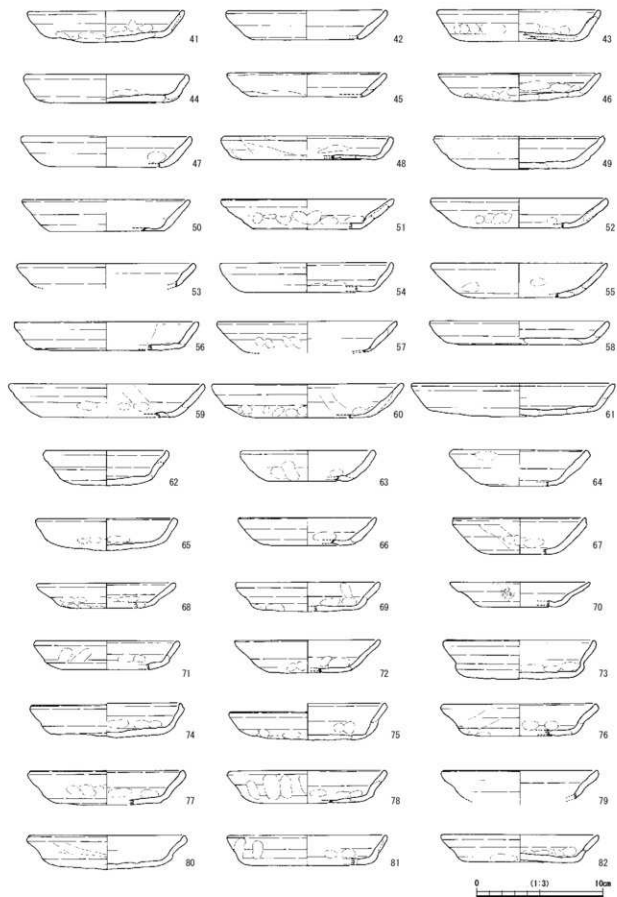
SD22出土土器 (第22～25図・第26図219～221) 2区のSD22より多量の土師質皿がほぼ一括廃棄された状況で出土した。器形の分かるものは全て抽出し、合計219点を図化した。その上で、口径・形態および成形と調整技法から、以下の9種類に分類を試みた。なお、分量による分類は、推定値を元に分類したのもも多いため、厳密ではない部分がある。

まず、口径10cm以上の大皿 (I類) および口径10cm以下の小皿 (II類) とに大別し、その上で形態等による分類を以下のように試みた。

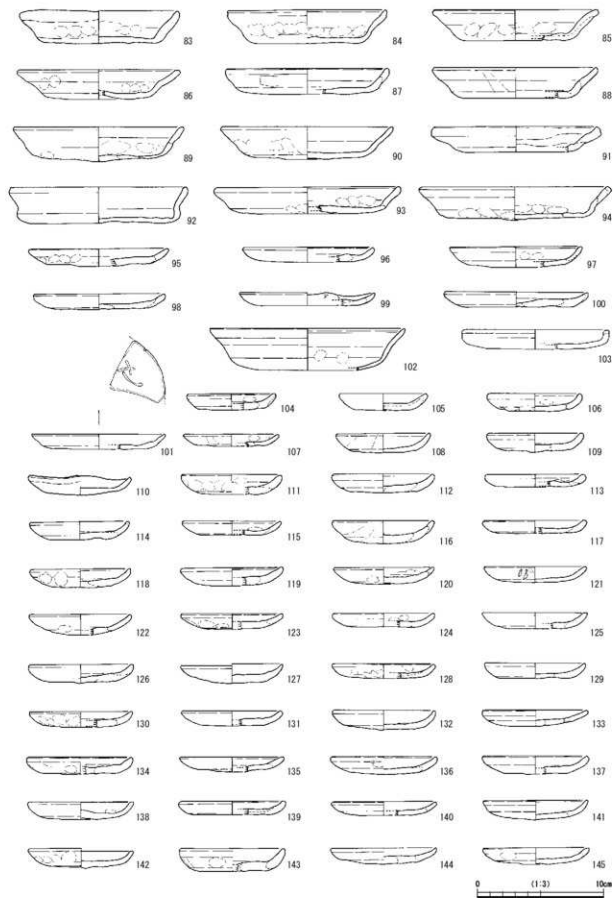
- I-A類：立ち上がりが緩やかで、内湾するもの。器高が2.5cm前後を測るものが多く、口径は12cmが中心である。一段ナデである。(第22図1～24)
 - I-B類：立ち上がりが急で、口縁が斜め上方に真っ直ぐ広がるもの。過半数にツマミナデを施す。口径は12～13cmが中心である。一段ナデだが、多くは複数回ナデ回す。(第22図25～第23図61)
 - I-C類：口縁の立ち上がりが強く、外側に屈曲するもの。口縁半ばでくびれて外反する。口径は12～14cmまでばらつきを持つ。内面見込みにナデ調整による溝が巡り、底部を作る明確な意図が見受けられる。そのため底部見込み付近がやや薄い造りになっているものがある。一段ナデである。不明瞭な面取りの痕跡が散見される。(第23図62～第24図94)
 - I-D類：立ち上がりが緩やかで、器高が1.0cm～1.7cmと低いもの。(第24図95～101)
 - I-E類：立ち上がりがやや緩やかで、口縁半ばでくびれて大きく開くもの。器壁が約4mm以下と比較的薄い。口径は15cmを測る。1点のみの出土である。(第24図102)
 - I-F類：立ち上がりが直立気味に屈曲し、口縁が真上に短く伸びるもの。口径は推定約12cmである。1点のみの出土である。(第24図103)
 - II-A類：平底のもの。器高は低く、1.0～1.5cmが中心である。口径は7～8cmが中心である。半数以上に「の」の字ナデ成形の痕が認められる。点数は最も多い。(第24図104～第25図195)
 - II-B類：丸底のもの。器高は1.5～2.0cmが大半である。口径は7～8cmが中心である。半数弱に「の」の字ナデ成形の痕が認められる。(第25図196～214)
 - II-C類：立ち上がりが急で、口縁が斜め上方にまっすぐ伸びる、ないし、わずかにくびれて外反するもの。口径は9cm台を測り、器高は2.0～2.5cmに収まる。(第25図215～217)
 - II-D類：口縁が直立気味に立ち上がるもの。器高は0.8cmを測る。一点のみである。(第25図218)
- 出土状況からそれぞれの分類の組成についてみると、I-A類、I-B類およびII-A類は必ず共伴することから同時期性がうかがわれる。その他I-E類とII-D類が共伴する。
- 以上の分類の位置づけについての詳細は、第6章のまとめの項目で記述する。



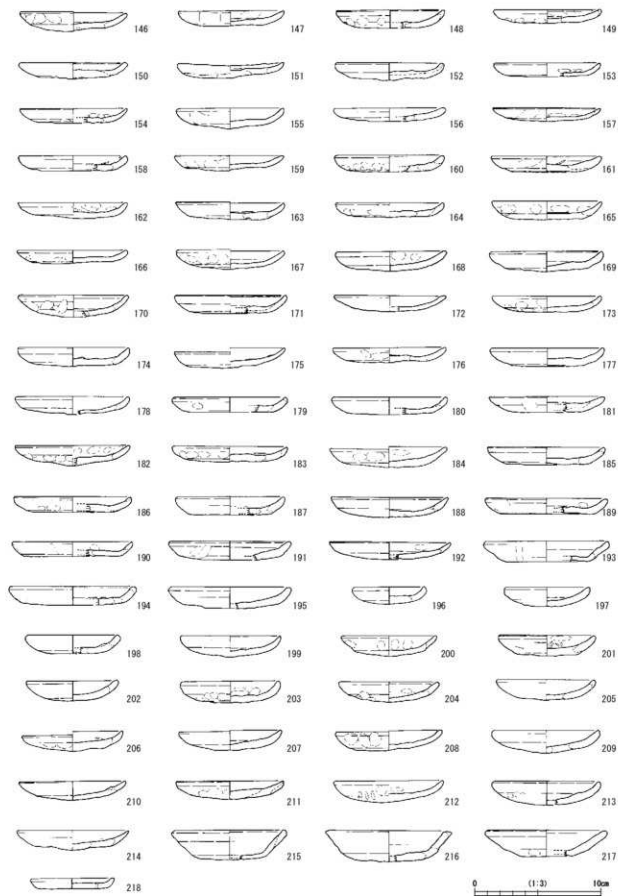
第22図 SD22出土土師質皿実測図(1) (縮尺1/3)



第23圖 SD22出土土師質皿実測図(2) (縮尺1/3)



第24図 SD22出土土師質皿実測図(3) (縮尺1/3)



第25図 SD22出土土師質皿実測図(4) (縮尺1/3)

219は土鍋である。丸みを帯びる体部から外側にくの字状に屈曲する頸部と内湾する口縁部を持つ。口縁端部は面を持つ。口径は34.0cmを測る。体部内面と口縁部内面に横方向のハケ調整がなされる。体部外面上部はヨコナデ調整がなされるが、押圧成形成による凹凸感が激しい。体部下部には不定方向のハケ調整が施される。時期は13世紀後半と推定される⁽¹⁾。

220は片口鉢である。内面全体に自然釉がかかっており、焼成時に一番上に重ねられていたことが分かる。高台は断面形状逆三角形を呈し、体部は直線的に外側に開く。東海系瓷器の可能性はある。

221は同安窠系の青磁皿Ⅰ類である⁽²⁾。内面に劃花文を施す。底部は無高台で軸を削り取る。

SD2 出土土器 (第26図222~225) 222は須恵器の杯身B⁽³⁾である。底部のみ残存する。高台底部にナデ調整が施される。内面は回転ナデの後、底部に軽いナデが施される。

223は青磁碗である。内面に片切彫りによる劃花文を持つ。底部はやや厚みがあり、低い高台を持つ。全面施釉後に高台内部及び畳付の釉を削り取っている。釉はやや厚くかかり、釉調はくすんだ緑色である。14世紀前半頃と考えられる⁽²⁾。

224は瀬戸焼の卸し皿である。内面に卸目が格子状に施され、外面底部に回転系切り痕を残す。

225は土師質皿である。平底を呈し、口縁は緩やかに立ち上がる。内面に同心円状のナデが施され、外面にはユビオサエの痕が残る。内面口縁部に煤が付着する。灯明皿である。

SD1 出土土器 (第26図226) 226は土師質皿である。「の」の字ナデ成形で平底を呈する。口縁は斜め上方に真っ直ぐ広がる。内面口縁部および断面に煤が付着しており、廃棄後に被熱したとみられる。

SD3 出土土器 (第26図227) 227は土師質皿である。丸底を呈し、口縁が緩やかに立ち上がる。

SD4 出土土器 (第26図228・229) 228は調査区南壁際のSD4底部より出土した土師器の長胴甕である。くの字状口縁で口縁端部をツマミ上げる。口縁内面は摩滅するが横方向のハケ調整の痕跡が残り、口縁外面はヨコナデ調整である。体部内面は斜め方向のケズリが認められる。体部外面は肩部を横方向、そして体部を縦方向に、7~10条を一単位としたハケ目が明瞭に付く。さらに体部外面には広範囲に煤が付着しており、片面では特に著しい。時期は7世紀半ば頃と推定される⁽⁴⁾。

229は須恵器の有蓋高杯である。脚端部は上方にツマミ上げられ、端部外側に面を持つ。脚部に二方向の透かしを有する。ややゆがむ。TK209併行期と推定される。

SD14 出土土器 (第26図230・231) 230は瀬戸焼の卸し皿である。内面にヘラによる卸目が格子状に施され、外面底部には回転系切り痕を残す。

231は須恵器の皿A⁽³⁾である。外面底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を行い、口縁部は回転ナデ調整を施す。器高は2.1cmである。8世紀末~9世紀初め頃と考えられる。

SR1 出土土器 (第26図232・233) 232は出土した土師器の甕である。口縁部が短く屈曲も甘い。口縁端部は内側にわずかに肥厚する。口縁外面はヨコナデ調整、内面は横方向のハケナデ調整が認められる。体部は図化していないが、内外面共に多方向のハケ目が残る。

233は須恵器の杯身Bである。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を行い、高台貼付け後回転ナデが施される。体部は内外面共同回転ナデが施される。口縁は内湾気味に立ち上がる。8世紀末~9世紀初め頃か。

SK1 出土土器 (第27図234・235) 234は青磁碗である。内面に片切彫りによる劃花文を持つ。底部は厚みがあり、低い高台を持つ。全面施釉後、畳付部分及び高台内面の釉を削り取っている。釉はやや厚くかかる。釉調は黄味を帯びたくすんだ緑色である。13世紀末~14世紀初頭と考えられる⁽²⁾。

235は土師質皿である。立ち上がりが緩やかで、内湾する口縁を持つ。弱いツマミナデを呈する。

SK11出土土器 (第27図236~240) 236は白磁である。内面立ち上がりに圈線を持つ。高台は低く、断面が逆台形をなす。高台内部及び壺付が露胎であるから、逆さにしてずぶ漬けしたと考えられる。釉調はやや青みがかかった色調である。時期は13世紀末~14世紀初め頃と考えられる。⁽⁵⁾

237・238は土師質皿である。いずれも「の」字ナデ成形で口径10cm以下を測る。237は口唇部にツマミナデが施される。238は「の」字ナデ成形が認められる。

239・240は土師質皿である。いずれも口径10cm以上を測る。口縁の立ち上がりは緩やかであり、内湾気味である。

SE1出土土器 (第27図241~244) 越前焼の播鉢2点(241・242)が出土した。241は、寸法が口径推定25.2cm、底径推定12.8cm、器高12.2cmである。口縁端部が内傾してふくらみを持ち、沈線が1条巡る。体部内面に直角文が認められる。高台は退化しており非常に浅い。木村編年のⅡ3期(13世紀末~14世紀初頭)と推定される。⁽⁶⁾ 242は、口縁と底部を欠く。高台は高さが低く、断面が逆三角形を呈し、外側に張り出す。寸法は底径が推定17.8cm、器高が12.5cm以上である。木村編年のⅡ2新时期(13世紀後半頃)と推定される。⁽⁶⁾

243・244は土師質皿である。243は「の」字ナデ成形であり、器高が2.0cmとやや高い小皿である。244は口縁内面に煤が付着する。口縁が斜め上方に真っ直ぐ広がり、弱いツマミナデが施される。

SK6出土土器 (第27図245) 245は土師質皿である。器高が1.0cmと低く、ツマミナデが施される。

SK3出土土器 (第27図246・247) 246・247は土師質皿である。いずれも口径13cm台を測る。246は立ち上がりがやや腰折れ気味であり、底面に溝が浅く巡る。247は立ち上がりが緩やかで内湾する。

SB6-P1出土土器 (第27図248) 248は土師質皿である。口径7cm台に対し、器高2.0cmと高い。口唇部のツマミナデが顕著である。灰黄褐色を呈し、内面に煤が付着する。

SB5-P17出土土器 (第27図249) 249は土師質皿である。口径12cm台を測り、口縁がゆるやかに内湾する。口唇部には面取りが認められる。

SE2出土土器 (第27図250) 250は畿内の赤彩暗文土師器の杯Cである。⁽⁷⁾ 寸法は、口径18.4cm、底径13.6cm、器高が6.6cmを測る。やや丸底気味で、口縁端部が内傾する。外面底部にヘラケズリが施され、口縁部はヨコナデの後にミガキが施される。内面口縁に一段放射暗文、底部に螺旋暗文が巡る。内外両面に赤彩がみとめられる。飛鳥Ⅲ(7世紀後半)と考えられる。⁽⁸⁾

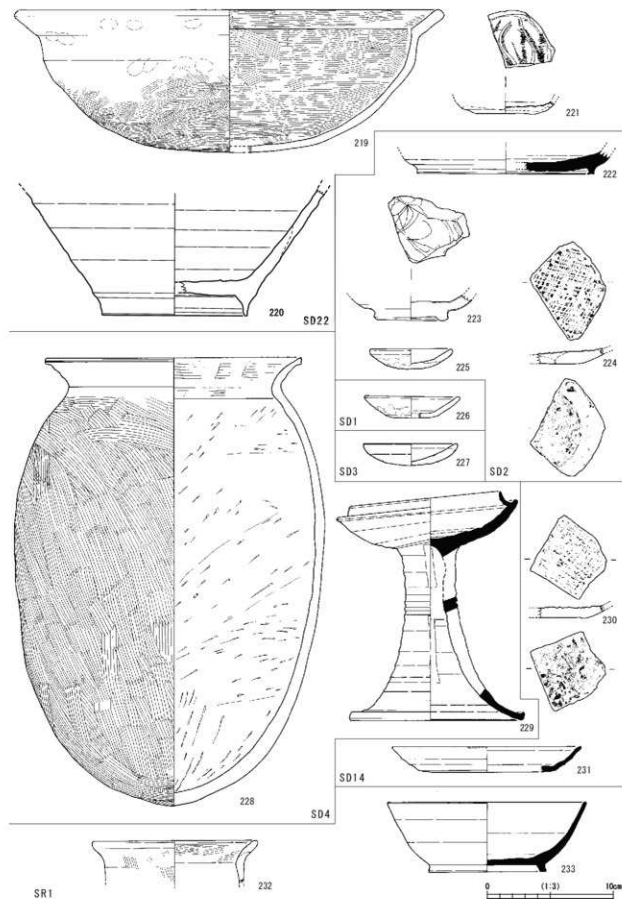
SX1出土土器 (第27図251) 251は土師器の甕である。口縁部があまり伸びず、頸部の屈曲がやや甘い。口縁端部がツマミ上げられる。口縁内外縁はヨコナデ調整がなされ、内面に工具痕が残る。体部外面上半は7~9本を一単位とするハケ目が縦方向に入り、下半は斜め方向に施される。体部内面は斜め方向のケズリが認められる。丸底を呈し、長胴気味である。

2 包含層・カク乱出土土器

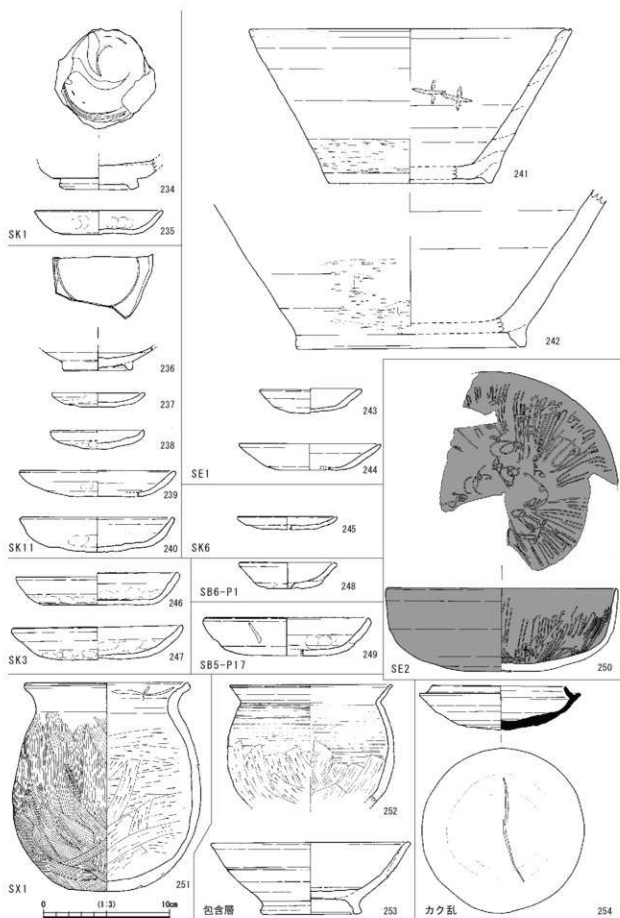
包含層出土土器 (第27図252・253) 252はグリッドNo.B2~3の包含層から出土した土師器の甕である。口頸部が直線的に開き、口縁端部はやや外反し、丸く収める。体部は球体を呈し、上半部の内外に横方向にヘラナデ調整を持つ。下半部には縦方向のケズリ調整が認められる。器壁はやや薄い。

253はグリッドNo.B17の包含層から出土した土師器の有台埴である。口縁は内湾気味に立ち上がる。

カク乱出土土器 (第27図254) 254は須恵器の杯身⁽³⁾である。口唇部は内面に傾き、器高は3.50cmと低めである。外面底部にヘラ記号を刻む。TK209併行期と推定される。



第26図 SD類・SR1出土土器・陶磁器実測図(縮尺1/3)



第27図 SE1・SK類・SB類・SX1・包含層・カク乱出土土器・陶磁器実測図(縮尺1/3)

第2節 木製品

SK1出土木製品（第28図254～261） 254は、容器の組み木作りの底板の一部と考えられる。片側側面に木釘穴が2箇所穿たれる。寸法は長径38.0cm、短径4.8cm、厚さ1.5cmである。樹種はスギである。

SK1の集水椀として積み上げられた曲物と曲物の間に敷き並べるようにして、板材の255・256・257が出土した。いずれの片面にも、曲物を上から据え付けられた時にできた弧状の圧痕が認められる。256・257については片面に無数の切断痕が認められることから、組板からの転用と考えられる。さらに255は、組板としての転用前は、形状から折敷として使用されていたと考えられる。樹種はいずれも水に強いヒノキが使用されており、集水椀の構築部材として選択的に木材を利用していたことがうかがえる。

258は、板材である。寸法は長径48.0cm、短径3.2cm、厚さ0.6cmである。全体的に劣化が著しいため加工混の判別が難しいが、片端を細く削りこんでいることが認められる。樹種はスギである。

259はへら状木製品である。寸法は長径14.2cm、短径2.2cm、厚さ0.3cmである。片側1/2程を細く削り込んでいる。樹種はスギである。

SK1の集水椀として260・261が据え付けられた状態で出土した。全部で4段分からなる。内面には縦方向の連続する切り込みを入れ、樹皮を用いて結束する。また3段目と4段目には下端に木釘穴が数箇所並んでいることが認められる。樹種はスギである。8世紀後半～10世紀後半と推定される。

SE1出土木製品（第29図262～268） 262は片側が黒く炭化していることから、附木であると考えられる。寸法は長径16.2cm、短径1.4cmを測る。樹種はアスナロ属である。

263は板材である。一端の側面に、穿孔の痕跡が残ることから、組み木作りであった可能性がある。樹種はスギである。

264は板材である。樹種はアスナロ属である。

265は板材である。一端の両側を細く削る。樹種はアスナロ属である。

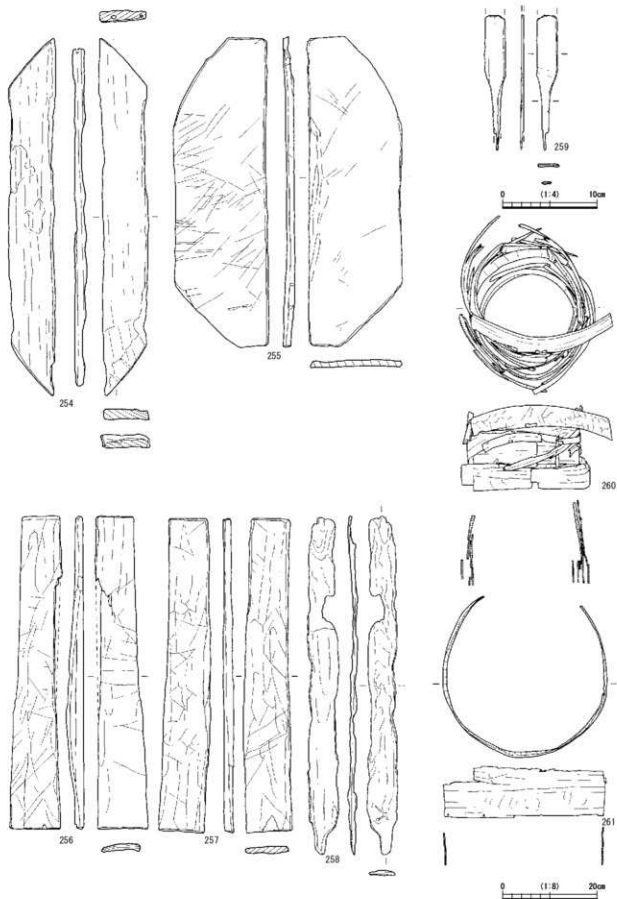
266・267・268は曲物の底板である。268は側面に2箇所木釘を差し込む小穴が認められる。266・267の樹種はアスナロ属であり、268の樹種はスギである。

SE2出土木製品（第29図269～第30図271） 269は、容器の底板である。寸法は直径21.6cm、厚さ0.5cmを測る。小穴に木釘が差し込まれたままの箇所が側面に3箇所認められる。片面のほぼ全面に墨書を確認した。しかし、判読できた箇所は少ない（第32図参照）。なお、墨書のある面に無数の切り傷があることから、墨書が書かれる前または後に組板として使用し、最後に曲物の底板として使用した可能性がある。樹種はヒノキである。時期は8～9世紀と推定される。

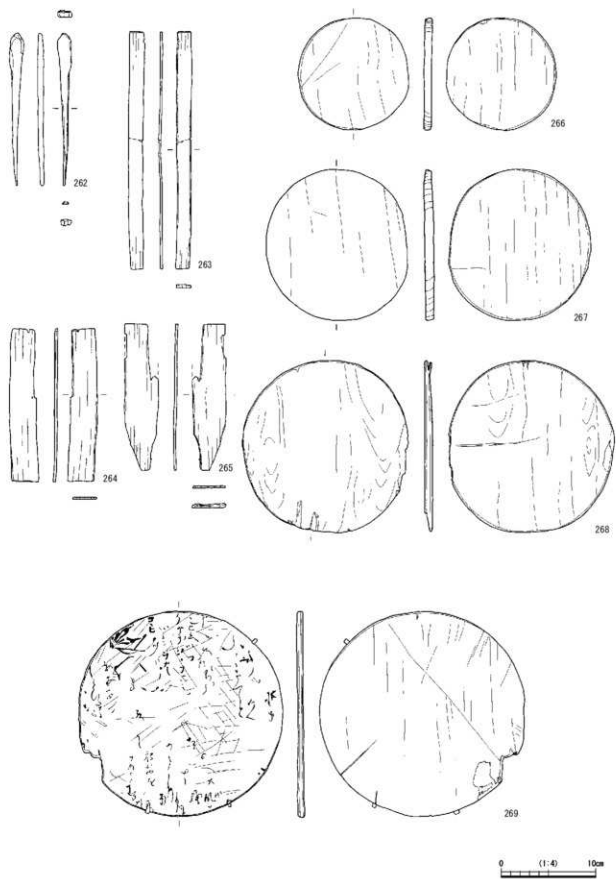
270は完形の曲物の底板である。寸法は長径10.4cm、短径10.3cm、厚さ1.2cmを測る。側面に木釘穴が2箇所穿たれており、内1箇所には木釘がはまっている。樹種はスギである。

271は曲物の蓋である。寸法は長径20.8cm、短径17.0cm、厚さ0.7cmを測り、一部欠損部分がある。端部は面取りする。なお、両面に切り傷があり、特に片面には無数の切り傷が集中することから、組板からの転用もしくは組板への転用が想定される。樹種はヒノキである。

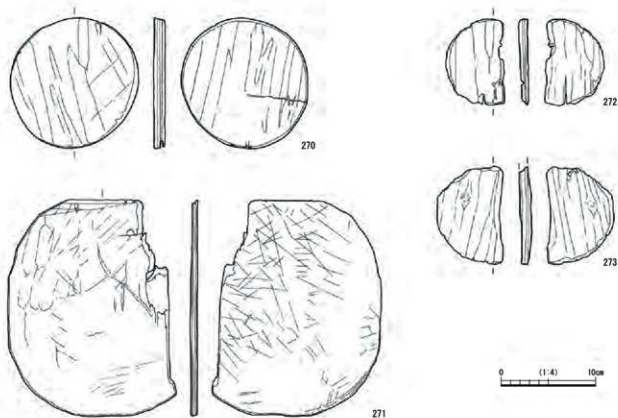
SD21出土木製品（第30図272・273） SD21から272・273が出土した。両者とも容器の底板と考えられる。272は1/2が残存している。断面に木釘を差す小穴が2箇所開いており、目釘による寄木作りであるとされる。内1箇所の小穴には木釘がはまっている。273は2/3が残存している。側面に小穴が穿たれ、木釘がはまったままになっている。272・273とも樹種はアスナロ属である。



第28図 出土木製品実測図(1) (No.280・281:縮尺1/8, 他:縮尺1/4)



第29図 出土木製品実測図(2) (縮尺1/4)



第30図 出土木製品実測図(3) (縮尺1/4)

第3節 土製品・石製品・金属製品

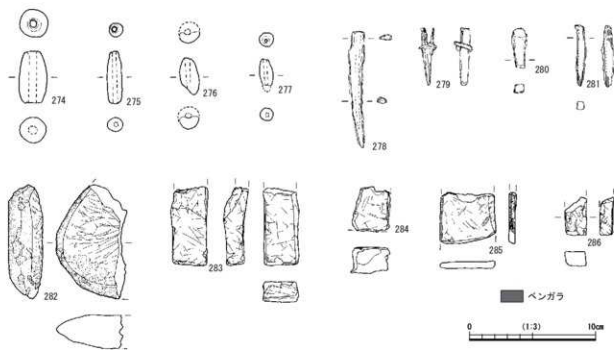
土製品 (第31図274～277) SD3・SD22のほか遺構外から土錘が4点出土した。芯棒に粘土を巻き付けて成形したものである。いずれも土師質の管状土錘である。

金属製品 (第31図278～281) SD3から鉄製刀子が1点(278)、グリッドNo.B8のSD18から錠前(部品)が1点(279)、グリッドNo.B12のSD30から鉄釘が1点(280)、グリッドNo.B8のSD18から鉄釘(ペンガラ付着)が1点(281)出土した。

釘の頭には扁平なものと、さらに巻き込んだものがあることが知られている。⁽³⁹⁾ 280は釘頭部のみが残存しており、多量の土砂が付着しているもののX線透過写真より扁平頭とみられる。281は巻頭の角釘とみられる。一部表面にペンガラが付着する。

279は錠前に類するものである。3枚の扁平な細長い板が片側で接合し、もう片側は開く。それらに直行して束状の小さい板がはめ込まれている。本体に固定する飾り金具がつく可能性がある。⁽³⁹⁾

278は茎(なかご)とみられる部分と僅かに反りを持つ上身とに分かれることから小柄を失った刀子の可能性はあるが、茎から上身半ばにかけて中空になっている点に疑問が残る。切っ先は欠損している。



第31図 出土土製品・金属製品・砥石実測図(縮尺1/3)

石製品 (第31図282～286) SD 3・22、SK11などから砥石が5点出土した。283・284は泥岩、285・286は凝灰岩類であり、282は泥岩の可能性ある。282は敲打痕を有する。

註

- (1) 福井県埋蔵文化財調査センター 2001 『福井県埋蔵文化財調査報告第52集 小倉石町遺跡-県営中山間地域総合整備事業に伴う調査-』
- (2) 上田 秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 第2号』日本貿易陶磁研究会
横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について-形式分類と編年を中心として-」『九州歴史資料館研究論集4』
- (3) 須恵器の器種分類は、TK209併行期のものについては「陶色窯跡群発掘調査概要」(大阪府教育委員会文化財保護課 1998)に準ずる。それ以外のものについては、「奈良国立文化財研究所報26:平城宮発掘調査報告7」(奈良国立文化財研究所 1976)に準ずる。
- (4) 望月 精司 2007 「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落-移民系者炊具と堅穴建物構造、集落経営の視点から-」『日本考古学 第23号』
- (5) 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究 第2号』日本貿易陶磁研究会
- (6) 福井県埋蔵文化財調査センター 2016 『福井県教育庁埋蔵文化財調査センター-所報6 越前総合調査事業報告書』
- (7) 器種分類については、奈良文化財研究所の分類に準じる。神野恵 2005 「土器類」『平城宮発掘調査報告XVI』奈良文化財研究所学報 第70冊 奈良文化財研究所
- (8) 古代の土器研究会 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』
- (9) 福井県教育委員会 朝倉氏遺跡調査研究所 1979 「特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡X-昭和53年度発掘調査整備事業概報-』
- (10) 福井県埋蔵文化財調査センター 2004 『福井県埋蔵文化財調査報告第72集 福井城跡(-JR北陸線外2線連続立体交差事業および高架側道4号線街路工事に伴う調査-)]

第1表 陶磁器観察表 (遺物の番号は、神田・写真図版の番号と同じ)

()は推定値

遺物 No.	種類	出土遺構 層位	残存 率	寸法(cm)			成形	構成	胎土		調整	備考
				口径	底径	高さ			色	密度		
236	白磁碗	H12-SK11	30	—	5.5	1.6	回転コケロ成形	良好	5YR/1 灰白色	密	内面) 回転コケロ磨削、磨削。 外面) 回転コケロの磨削。	白磁碗から、逆さまにしてすぶ 削り付いた。
234	青磁碗	C19-SK1	10	—	0.50	2.4	回転コケロ成形	良好	5N/1 灰白色	密	内) 回転コケロ。 外面) 回転コケロの磨削。	刷毛文。逆さま削り取り。
223	青磁碗	C22-SD2	10	—	0.60	2.0	回転コケロ成形	良好	10Y7/1 灰白色	密	内) 回転コケロ。 外面) 回転コケロの磨削。	刷毛文。
221	青磁皿	SD22	10	—	0.50	1.1	回転コケロ成形	良好	7.5Y7/2 灰白色	密	内面) 回転コケロ磨削。 外面) 回転コケロの磨削。	刷毛文。
242	藤原御 鉢鉢	C30-SB1	35	—	0.70	12.5	粘土懸濁上投法	良好	7.5Y9/3 褐色	やや密	内面) 回転コケロ磨削。 外面) 回転コケロ磨削。 外面) 体部回転コケロ。ヘラケツリ磨削。	
241	藤原御 鉢鉢	C30-SB1	50	06.20	0.20	12.2	粘土懸濁上投法	良好	5Y8/2 灰褐色	やや密	内面) 回転コケロ磨削。 外面) 体部回転コケロ磨削。底部へ体部ツ リ。	口唇部沈澱一帯。底角文有。
230	刷毛皿	H19-SD14	5	—	—	1.1	回転コケロ成形	良好	10Y8/1 灰白色	やや軽い	底面) 回転コケロ取り。	
224	刷毛皿	B25-SD2	5	—	—	1.2	回転コケロ成形	良好	10Y8/3 褐色	密	底面) 回転コケロ取り。	
220	某海舟 片口鉢	SD22	10	—	0.20	9.7	粘土懸濁上投法	良好	2.5Y7/1 灰白色	密	高台部付後回転コケロ。	

第2表 土師質皿観察表 (遺物の番号は、神田・写真図版の番号と同じ)

()は推定値

遺物 No.	種類	出土遺構 層位	残存 率	寸法(cm)			成形	構成	胎土		調整	備考
				口径	底径	高さ			色	密度		
1	土師質皿	SD22	25	00.90	0.80	2.4	手づく くわ	軟	7.5Y7/4 にぶい・褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	
2	土師質皿	SD22	10	01.20	0.80	1.8	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 一方方向ナガ。口唇部強いツマミナガ。	
3	土師質皿	SD22	10	01.20	0.70	2.2	手づく くわ	軟	7.5Y8/3 黄褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	
4	土師質皿	SD22	10	01.60	0.60	2.4	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部面取り磨削。	
5	土師質皿	SD22	10	01.80	0.80	2.2	手づく くわ	軟	7.5Y7/4 にぶい・褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。口唇部面取り。	
6	土師質皿	SD22	10	02.00	0.80	1.9	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。	
7	土師質皿	H7-SD22	5	02.00	0.70	2.3	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。	
8	土師質皿	SD22	50	02.00	0.50	2.9	手づく くわ	軟	7.5Y7/4 にぶい・褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	刷毛ノハ。
9	土師質皿	SD22	20	02.20	0.70	3.0	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	
10	土師質皿	SD22	20	02.20	0.60	2.6	手づく くわ	生野射	7.5Y7/4 にぶい・褐色 外見黄褐色	やや 軽い	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。	
11	土師質皿	SD22	80	12.3	9.7	2.6	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部面取り。	
12	土師質皿	SD22	5	02.20	0.20	2.4	手づく くわ	軟	7.5Y8/3 黄褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	
13	土師質皿	H7-SD22	80	12.6	9.1	3.3	手づく くわ	軟	7.5Y7/2 にぶい・褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部強い面取り。	
14	土師質皿	SD22	90	12.7	9.3	2.6	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	磨削ノハあり。 刷毛ノハあり。
15	土師質皿	SD22	30	02.70	0.90	2.5	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部強い面取り。	やや磨削。
16	土師質皿	SD22	30	02.80	0.01	2.1	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	
17	土師質皿	SD22	20	03.00	—	2.7	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。口唇部ツマミナガ。	
18	土師質皿	SD22	30	03.00	0.90	3.2	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。口唇部強い面取り。	
19	土師質皿	SD22	30	03.20	0.00	3.2	手づく くわ	軟	7.5Y7/4 にぶい・褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 一方方向ナガ。口唇部面取り。	
20	土師質皿	H7-SD22	15	03.50	0.80	1.9	手づく くわ	軟	7.5Y8/3 黄褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	底付唇。破砕後 観察。
21	土師質皿	SD22	40	03.50	0.90	3.1	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	
22	土師質皿	SD22	10	04.00	0.24	2.6	手づく くわ	軟	7.5Y7/4 にぶい・褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) 一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。口唇部面取り。	
23	土師質皿	SD22	20	05.70	0.40	2.9	手づく くわ	軟	7.5Y7/4 にぶい・褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	
24	土師質皿	SD22	10	07.00	—	1.6	手づく くわ	軟	7.5Y7/2 にぶい・褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。口唇部ツマミナガ上磨削。	
25	土師質皿	SD22	50	01.30	0.20	2.5	手づく くわ	軟	7.5Y8/6 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	
26	土師質皿	H7-SD22	10	01.40	0.30	2.5	手づく くわ	軟	10Y9/2 灰白色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。口唇部ツマミナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	
27	土師質皿	SD22	40	01.60	0.70	2.5	手づく くわ	軟	7.5Y8/3 黄褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。	
28	土師質皿	SD22	30	01.50	0.20	2.6	手づく くわ	軟	7.5Y7/4 にぶい・褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	
29	土師質皿	SD22	10	01.50	0.80	2.7	手づく くわ	軟	7.5Y7/4 にぶい・褐色	やや 密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) 一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 多方向ナガ。口唇部強いツマミナガ。	底付唇。
30	土師質皿	SD22	40	01.80	0.30	2.0	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。口唇部ツマミナガ。	磨削ノハあり。
31	土師質皿	SD22	10	01.90	0.30	2.4	手づく くわ	軟	7.5Y7/6 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 一方方向ナガ。	
32	土師質皿	SD22	10	02.00	0.90	2.2	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。口唇部強い面取り。	
33	土師質皿	SD22	10	02.00	0.30	2.2	手づく くわ	軟	7.5Y8/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コケロナガ。底面) コビテエニセエ一方方向ナガ。 外面) 口縁部コケロナガ。底面) 一方方向ナガ。口唇部面取り。	

遺物 No.	種別	出土遺構 層位	残存 率	法量(m)			形状	構成	粘土		調査	備考
				口徑	底径	高さ			色	密度		
180	土師瓦	S022	20	0.80	0.60	1.4	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
181	土師瓦	S022	30	0.80	0.60	1.3	平づく ね	軟	F.5Y8R/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。	
182	土師瓦	S022	30	0.80	0.70	1.6	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ後コナテ、底部コナテニテ後一方ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後一方ナテ。	
183	土師瓦	S022	25	0.80	0.70	1.2	平づく ね	軟	F.5Y8R/4 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ後コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。 口縁部狭いツツミナテ。	
184	土師瓦	S022	60	0.80	0.9	1.7	平づく ね	軟	F.5Y87/4 褐色	密	内面) 口縁部コナテニテ後コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテニテ後コナテ、底部多方向ナテ。	摩耗。
185	土師瓦	S022	25	0.80	0.80	1.4	平づく ね	軟	F.5Y87/4 褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部一方ナテニテ後コナテニテ、口縁部狭いツツミナテ。	
186	土師瓦	S022	20	0.90	0.80	1.3	平づく ね	生跡?	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ後コナテニテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。 口縁部狭いツツミナテ。	
187	土師瓦	S022	10	0.80	0.60	1.5	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後一方ナテ。	
188	土師瓦	S022	25	0.80	0.80	1.6	平づく ね	軟	F.5Y8R/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。	
189	土師瓦	S022	10	0.80	0.70	1.5	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。	
190	土師瓦	S022	20	0.80	0.80	1.2	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
191	土師瓦	S022	20	0.80	0.80	1.5	平づく ね	軟	F.5Y8R/4 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後一方ナテ。	
192	土師瓦	C7-S022	20	0.80	0.80	1.4	平づく ね	軟	F.5Y8R/6 褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	摩耗。
193	土師瓦	H7-S022	5	0.70	0.60	1.4	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ、口縁部狭いツツミナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。	
194	土師瓦	S022	20	0.70	0.80	1.5	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭い(底取り)。	
195	土師瓦	H7-S022	20	0.80	0.80	1.7	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。	
196	土師瓦	S022	20	0.80	0.80	1.4	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
197	土師瓦	S022	10	0.60	0.60	1.6	平づく ね	軟	F.5Y8R/4 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。	
198	土師瓦	S022	20	0.80	0.80	1.5	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
199	土師瓦	S022	40	0.70	0.80	1.7	平づく ね	生跡?	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。	
200	土師瓦	S022	40	0.70	0.70	1.6	平づく ね	軟	F.5Y87/4 褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテニテ後コナテニテ多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
201	土師瓦	S022	30	0.70	0.80	1.6	平づく ね	軟	F.5Y8R/4 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテニテ後コナテ、底部コナテニテ後一方ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ、口縁部狭い(底取り)。	
202	土師瓦	S022	30	0.70	0.80	1.6	平づく ね	生跡?	F.5Y87/4 褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
203	土師瓦	S022	20	0.80	0.80	1.7	平づく ね	生跡?	F.5Y8R/3 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
204	土師瓦	S022	30	0.70	0.80	1.7	平づく ね	軟	F.5Y87/4 褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
205	土師瓦	S022	20	0.80	0.80	1.7	平づく ね	軟	10YR5/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り。 外面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ。	
206	土師瓦	S022	95	0.80	0.80	1.6	平づく ね	軟	F.5Y87/4 褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
207	土師瓦	S022	90	0.80	0.80	1.6	平づく ね	軟	10YR5/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り。 外面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ、口縁部狭い(底取り)。	
208	土師瓦	S022	90	0.80	0.80	1.6	平づく ね	軟	F.5Y87/4 褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
209	土師瓦	S022	15	0.80	0.70	1.9	平づく ね	生跡?	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
210	土師瓦	S022	20	0.80	0.80	1.5	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
211	土師瓦	S022	20	0.80	0.80	1.5	平づく ね	軟	F.5Y8R/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
212	土師瓦	S022	70	0.80	0.80	1.8	平づく ね	軟	10YR5/3 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後一方ナテ。 外面) 口縁部コナテニテ後多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
213	土師瓦	H7-S022	20	0.80	0.60	1.9	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。	工具痕あり。
214	土師瓦	S022	30	0.80	0.80	1.6	平づく ね	軟	10YR5/2 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	内面面に欠損。
215	土師瓦	S022	30	0.80	0.80	2.4	平づく ね	軟	F.5Y8R/4 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
216	土師瓦	S022	40	0.80	0.80	2.5	平づく ね	軟	10YR5/4 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部面に欠損。	
217	土師瓦	H7-S022	10	0.70	0.60	2.1	平づく ね	中々 軟	10YR5/4 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。	
218	土師瓦	S022	40	0.80	0.80	0.8	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
225	土師瓦	C33-S02	30	0.70	0.80	1.8	平づく ね	良好	F.5Y87/4 褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	釘明目、内面) 口縁部底行直。
226	土師瓦	R04-S04	25	0.60	0.60	0.70	平づく ね	中々 軟	F.5Y8R/3 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	外面) 口縁部底行直。
227	土師瓦	RS1/22'-S02	20	0.80	0.80	1.8	平づく ね	生跡?	F.5Y8R/3 黄褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後一方ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。	
235	土師瓦	C19-SK1	30	0.80	0.80	1.9	平づく ね	軟	F.5Y87/4 褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ後コナテニテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
237	土師瓦	R13-SK11	30	0.70	0.80	0.80	平づく ね	中々 軟	F.5Y8R/3 黄褐色	密	内面) (内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ、口縁部狭いツツミナテ。	
238	土師瓦	R12-SK11	20	0.80	0.80	1.7	平づく ね	軟	F.5Y8R/3 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。	摩耗。
239	土師瓦	R12-SK11	30	0.80	0.70	2.2	平づく ね	中々 軟	F.5Y87/4 褐色	中々 密	内面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。	摩耗。
240	土師瓦	R12-SK11	30	0.12	0.03	2.8	平づく ね	中々 軟	F.5Y8R/6 褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部多方向ナテ。 外面) 口縁部コナテ、底部コナテニテ後多方向ナテ。	
243	土師瓦	C30-S03	80	0.80	0.80	2.0	平づく ね	軟	F.5Y7/3 黄褐色	密	内面) 口縁部コナテ、底部(内)のナテテ成り。 外面) 口縁部コナテ、底部一方ナテ、コナテニテ。	

第5章 遺物

遺物 No.	種類	出土遺構 層位	残存 率	流量(cm)			成形	構成	胎土		調査	備考
				口径	底径	高さ			色	密度		
244	土師質皿	C20-S21	30	0(1.1)	0.20	2.1	手づく わ	やや軟	10YR7/3 に黄褐色	やや 密	内面)口縁部コナダ、底部一方方向ナ。 外面)口縁部コナダ、底部一方方向ナ、口縁部凹みツマミナ。	打明皿、内面)底 付籠、口縁部鋭角。
245	土師質皿	87-SK6	25	0.00	0.00	1.0	手づく わ	やや軟	7.5YR/4 黄褐色	やや 密	内面)口縁部コナダ、底部ののりナダ成形多方向ナ。 外面)口縁部コナダ、底部多方向ナダ、口縁部ツマミナ。	
246	土師質皿	81H-SK3	100	13.0	8.9	2.6	手づく わ	軟	7.5YR/3 黄褐色	密	内面)口縁部コナダ、コナダを2位置多方向ナダ。 外面)口縁部コナダ、底部コナダを2位置多方向ナダ、口縁部凹みツマミナ。	
247	土師質皿	81H-SK3	70	13.2	9.6	2.6	手づく わ	軟	7.5YR/3 褐色	密	内面)口縁部コナダ、底部コナダを2位置多方向ナダ。 外面)口縁部コナダ、底部コナダを2位置多方向ナダ。	
248	土師質皿	81I- S26-P1	15	0.40	0.20	2.14	手づく わ	良好	10YR8/2 灰黄褐色	やや 密	内面)口縁部コナダ、底部一方方向ナダ。 外面)口縁部コナダ、底部コナダを2位置多方向ナダ、口縁部ツマミナ鋭角。	打明皿、内面)底 付籠。
249	土師質皿	86- S25-P17	30	0.20	0.70	3.0	手づく わ	軟	7.5YR/4 黄褐色	密	内面)口縁部コナダ、底部コナダを2位置多方向ナダ。 外面)口縁部コナダ、底部鋭角不規則、口縁部底取鋭角。	

第3表 須志器観察表 (遺物の番号は、挿図・写真図版の番号と同じ)

○は推定値

遺物 No.	種類	器種・用途	出土遺構 層位	残存 率	流量(cm)			成形	構成	胎土		調査	備考
					口径	底径	高さ			色	密度		
222	須志器	杯	823-S22	10	—	1(4.0)	1.9	回転コナ	良好	N6/1 灰白色	密	外面)底付付後傾斜コナダ、底面底部ナダ鋭角。 内面)回転コナダ後底取鋭角ナ。	
229	須志器	有蓋 高杯	825-S24	100	11.8	14.7	18.2	回転コナ	良好	N4/ 灰白色	密	外面)底部回転コナダ、杯底面回転ヘラケズ回転コナダ、 口縁部ツマミナ上げ成湾。 内面)口縁部コナダ、底部コナダを2位置多方向のユビナダ。	空み小、通し孔 有。(上下2段・ 2方向)
231	須志器	高A	819-S24	40	0(5.0)	0(1.0)	0.0	回転コナ	良好	N6/ 灰白色	密	外面)口縁部回転コナダ鋭角、底部回転ヘラケの後ナダ鋭角。 内面)回転コナダ鋭角。	
233	須志器	杯	817-S21	50	0(5.0)	0.20	0.6	回転コナ	良好	N6/ 灰白色	密	外面)口縁部回転コナダ鋭角、底部回転ヘラケの後ナダ鋭角。 内面)回転コナダ鋭角。	
254	須志器	杯	824- カケ丸	100	10.5	6.3	3.5	回転コナ	良好	N6/ 灰白色	密	外面)底部回転ヘラケの後傾斜コナダ、口縁部回転コナダ、 口縁部ツマミナ上げ成湾。 内面)回転コナダ後底面ユビナダ。	ヘラ記号有。

第4表 土師器観察表 (遺物の番号は、挿図・写真図版の番号と同じ)

○は推定値

遺物 No.	種類	器種・用途	出土遺構 層位	残存 率	流量(cm)			成形	構成	胎土		調査	備考
					口径	底径	高さ			色	密度		
219	土師質 土師	罎	S22	50	0(4.0)	0(0.0)	0(1.0)	—	良好	7.5YR/6 黄褐色	やや 密	内面)横方向のヘラケナダ。 外面)口縁部横方向のヘラケナダ、ユビオサエ。	外面)底付籠。
228	土師器	長頸 壺	825-S24	90	20.0	—	36.4	粘土 巻き上げ	良好	10YR8/2 灰白色	密	内面)横方向のヘラケ目、底部斜め方向のヘラケナダ、 口縁部ツマミナ上げ。 口縁部ツマミナ上げ。	
232	土師器	壺	817-NR1	20	0(3.0)	—	3.0	粘土 巻き上げ	良好	10YR8/3 に黄褐色	密	内面)口縁部横方向のヘラケナダ、口縁部凹み一島あり。 外面)口縁部コナダ、斜傾斜方向のヘラケ目、口縁部底取。 内面)底付に凹み。	
250	土師器	罎	C20-S22	40	0(8.0)	0(3.0)	6.6	—	良好	2.5YR/6 褐色	密	内面)1/2が横、底部中央に窪み付、同様に一段窪み付文。 外面)口縁部コナダ後底取ヒケキ、底部ヘラケナダ。	内外面)赤色 散粒。
251	土師器	壺	C24-SX1	80	16.6	—	15.0	粘土 巻き上げ	やや 軟	7.5YR/7 褐色	密	内面)口縁部コナダ、底部斜め方向のヘラケナダ。 外面)口縁部ツマミナ上げ、口縁部一方目のコナダ、底部一 底取斜め方向のヘラケ目。	底面底付籠。
252	土師器	壺	82-83 包含層	40	0(2.0)	—	9.5	回転コナ	軟	10YR8/3 黄褐色	やや 密	内面)口縁部コナダ、底部上方斜め方向のヘラケナダ、底部下 位ナメ目方向のヘラケナダ。 外面)口縁部コナダ、底部上方斜め方向のヘラケナダ、底部下 位ナメ目方向のヘラケナダ。	
253	土師器	有付 罎	817- 包含層	30	0(5.0)	0(0.0)	5.6	非回転	軟	5YR2/4 褐色	粗い	内面)コナダ曹造部のみ一方方向ナダ。 外面)底付付後下傾コナダ鋭角、口縁部凹み回転コナダ。	

第5表 木製品観察表 (遺物の番号は、挿図・写真図版の番号と同じ)

遺物 No.	種類	器種・用途	出土遺構・層位	残存率	流量			成形	備考
					長さ (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)		
254	木製品	曲物底版	C21-SK1	完形	38.0	4.8	1.5	スギ	
255	木製品	羽	SK1	完形	33.0	10.0	0.6	ヒノキ	多量版に転用後、SK1の曲物下部に設置。
256	木製品	板材(井戸側下部附付)	SK1	完形	33.1	5.4	0.6	ヒノキ	曲物附付籠有。
257	木製品	板材(井戸側下部附付)	C21-SK1	完形	32.4	5.0	1.0	ヒノキ	曲物附付籠有。
258	木製品	板材	C21-SK1	周縁一部欠損	48.0	3.2	0.6	スギ	
259	木製品	ヘラ状木製品	C21-SK1	一部欠損	14.2	2.3	0.3	スギ	
260	木製品	曲物附籠(井戸側) 1-3段	C21-SK1	一部欠損	37.9	31.9	18.1	スギ	SK1の幾木側に転用。
261	木製品	曲物(井戸側) 4段	C21-SK1	一部欠損	34.7	34.1	10.8	スギ	
262	木製品	煎木	C20-21-S21	完形	16.2	1.4	0.6	アスナロ属	先端鋭化。
263	木製品	板材	C20-21-S21	完形	25.2	1.6	2.0	スギ	
264	木製品	板材	C20-21-S21	周縁一部欠損	16.1	2.8	0.3	アスナロ属	
265	木製品	板材	C20-21-S21	一部欠損	15.6	3.7	0.2	アスナロ属	
266	木製品	曲物底版	C20-21-S21	完形	11.8	12.6	0.6	アスナロ属	
267	木製品	曲物底版	C20-21-S21	完形	16.0	15.0	0.9	アスナロ属	
268	木製品	曲物底版	C20-21-S21	完形	18.2	17.5	0.8	スギ	
269	木製品	曲物底版	C20-S22	一部欠損	21.6	21.6	0.5	ヒノキ	片面磨面有。多量版、曲物底版に転用。
270	木製品	曲物底版	C20-S22	完形	10.4	10.3	1.2	スギ	
271	木製品	曲物底	C20-S22	一部欠損	20.8	17.0	0.7	ヒノキ	多量版、曲物の面に転用。
272	木製品	曲物底版	87-S221	1/2欠損	9.1	6.1	0.8	アスナロ属	
273	木製品	曲物底版	87-S221	2/3欠損	10.4	7.0	1.1	アスナロ属	

第6表 土製品観察表 (遺物の番号は、挿図・写真図版の番号と同じ)

遺物 No.	種類	器種・用途	出土遺構 層位	残存率	法量				成形	構成	胎土		調整・備考	備考
					孔径(上) (cm)	孔径(下) (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)			色	密度		
					7.5% 10% 10% 10%		中や軟 軟 生織付 軟				7.5% 10% 10% 10%			
274	土製品	土鍋	R21-1層	100	0.6	0.8	2.2	16.80	棒状工具に粘土練垂き付け	中や軟	7.5% 10% 10% 10%	中や軟 密 密 密	斜め方向ナブ	
275	土製品	土鍋	C14-1層	100	0.3	0.3	1.2	5.81	棒状工具に粘土練垂き付け	軟	10% 10% 10% 10%	中や軟 密 密 密	斜め方向ナブ	
276	土製品	土鍋	R22-S03	30	0.3	—	1.6	3.40	棒状工具に粘土練垂き付け	生織付	10% 10% 10% 10%	中や軟 密 密 密	斜め方向ナブ	
277	土製品	土鍋	R7-S022	50	0.3	0.3	1.1	2.17	棒状工具に粘土練垂き付け	軟	10% 10% 10% 10%	中や軟 密 密 密	不平整	

第7表 石製品観察表 (遺物の番号は、挿図・写真図版の番号と同じ)

遺物 No.	種類	器種・用途	出土遺構・層位	残存率	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
					7.5% 10% 10% 10%				
282	石製品	砥石	B-C22-S022	1/3	9.1	5.6	2.5	156.00	両縁部(裏)打痕あり。砥石(裏)磨痕あり。
283	石製品	砥石	B24-包含層	一部欠損	6.3	2.9	1.6	44.54	被熱、砥石に磨痕あり。
284	石製品	砥石	B12-SK11	1/5	3.6	3.0	2.2	21.46	表面に磨痕あり。
285	石製品	砥石	R22-S022	1/3	4.1	4.4	0.6	16.98	砥石(裏)磨痕あり。
286	石製品	砥石	R22-S03	1/2	3.0	1.7	1.1	7.51	砥石に磨痕あり。

第8表 金属製品観察表 (遺物の番号は、挿図・写真図版の番号と同じ)

遺物 No.	種類	器種・用途	出土遺構・層位	残存率	法量 (cm)				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
					7.5% 10% 10% 10%				
278	金属製品	小刀	SD3/C20	100	9.3	1.2	6.0	9.00	上身内中欠。
279	金属製品	鋸前(鋸品)	SD18/38	90	4.6	1.4	1.4	6.20	
280	金属製品	釘	SD30/B12	30	9.3	1.2	6.0	6.20	先端部欠損。
281	金属製品	釘	SD18/38	100	4.9	0.8	0.7	5.70	ペンダラ付着。

第4節 木製品の樹種同定及び年代測定

1 樹種同定

出土木製品22点に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行った。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が低いことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりになる。

第9表に結果を示す。

第9表 樹種同定結果 (遺物の番号は、挿図・写真図版の番号と同じ)

遺物 No.	器種等	地区	出土遺構・グリッド等	結果 (学名/和名)	備考
254	曲物底板部材	1	SK1/C19-20	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
255	釘	1	SK1/C19-20	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
256	板材	1	SK1/C19-20	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
257	板材	1	SK1/C19-20	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
258	板材	1	SK1/C19-20	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
259	へうた木製品	1	SK1/C19-20	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
260	曲物側板	1	SK1/C19-20	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
	SK1/C19-20		<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ	
	SK1/C19-20		<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ	
261	曲物側板	1	SK1/C19-20	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
262	形木	1	SE1/C20-21	<i>Thuja</i>	アスナロ属
263	板材	1	SE1/C20-21	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
264	板材	1	SE1/C20-21	<i>Thuja</i>	アスナロ属
265	板材	1	SE1/C20-21	<i>Thuja</i>	アスナロ属
266	曲物底板	1	SE1/C20-21	<i>Thuja</i>	アスナロ属
267	曲物底板	1	SE1/C20-21	<i>Thuja</i>	アスナロ属
268	曲物底板	1	SE1/C20-21	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
269	曲物底板	1	SE2/C20	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
270	曲物底板	1	SE2/C20	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
271	曲物蓋	1	SE2/C20	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
272	曲物側板	2	SD21/B7	<i>Thuja</i>	アスナロ属
<i>Thuja</i>				アスナロ属	

2 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は物質に含まれる炭素同位体のひとつである ^{14}C を利用して年代を測定する方法である。本調査では出土木製品の内、SE2 曲物底板 (No.269) およびSK1 出土曲物側板 (No.260・261) の2点について、放射性炭素年代測定を行った。

測定の結果、曲物底板では8世紀から9世紀、水溜橋の曲物側板では8世紀後半から10世紀後半の年代が得られた(第10・11表)。遺跡の想定時期よりは古い時期である。出土陶磁器から13世紀末-14世紀初頭頃と推定されるSK1から出土したNo.260・261は、集水樋として据え付けられていたものである。水湿の影響のある用途のため、木材を利用する上で最外層に近い辺材を避けて水湿に耐える芯材を用いたと考えられる。このように辺材部を避けたことで木材の伐採年代より古い時期が測定されることを古木効果と言ひ、年輪幅が狭いものではより古木効果による年代の差異が大きくなることもある。No.260・261についても、木製品に必要な用材の確保のために大径木を用いて、用途のために芯材を選んだなどの要因により、古い年代が計測された可能性がある。

第10表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值) (遺物の番号は、挿図・写真図版の番号と同じ)

測定番号	遺物No.	遺構および器種	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正值	
						Libby Age (yrBP)	σ MC (%)
IAAA-200561	269	SE2 曲物底板	木片	AAA	-23.33 ± 0.27	1,210 ± 20	86.07 ± 0.25
IAAA-200562	260-261	SK1 曲物側板	木片	AAA	-24.67 ± 0.47	1,150 ± 20	86.7 ± 0.25

[IAA登録番号: #A273]

第11表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{13}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年較正範囲	2σ暦年較正範囲
	Libby Age (yrBP)	σ MC (%)			
IAAA-200561	1,180 ± 20	86.36 ± 0.24	1,205 ± 23	776calAD - 778calAD (3.8%) 789calAD - 889calAD (64.4%)	727calAD - 798calAD (3.1%) 789calAD - 889calAD (92.3%)
IAAA-200562	1,140 ± 20	86.76 ± 0.23	1,146 ± 22	783calAD - 786calAD (1.9%) 878calAD - 903calAD (24.7%) 918calAD - 965calAD (42.3%)	777calAD - 792calAD (5.9%) 803calAD - 846calAD (9.8%) 888calAD - 978calAD (57.7%)

[参考値]

参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久 2012 『木の考古学』 p.449 雄山閣
- 佐伯浩・原田浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』 p.20-48 文永堂出版
- 佐伯浩・原田浩 1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』 p.49-100 文永堂出版
- 島地謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 p.176 地球社
- 島地謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 p.296 雄山閣
- 山田昌久 1993 『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成』 植生史研究特別第1号 p.242 植生史研究会
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0 - 50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

第6章 まとめ

第1節 掘立柱建物について

検出した中世の掘立柱建物について、後世の掘削により各柱穴の上部が削り取られており、掘削深度は概して浅い。また検出した掘立柱建物からの遺物の出土は非常に少なく、図化できたのはSB5-P17およびSB6-P1から出土した土師質皿1点ずつのみであった。そのため、全ての建物の時期を特定することは困難であるものの、今回の調査で検出した掘立柱建物7棟について、遺物と位置関係から可能な範囲で時期の推定を試みたい。

まず1区の建物の内容についてみると、SB1~4の4棟が存在しており、SB1・4が2間×1間、SB2が2間×2間、SB3が2間以上×2間の規模を持つ。これらの内SB3は一面庇の構造を持つ。

これらの主軸の方向についてみてみると、北から西への傾きがSB1は72°、SB2は71°、SB3は68°、SB4は65°となっており、ほぼ軸が揃う。柱間寸法も全ての建物について2.2m前後と共通することから、近い時期のものと考えられる。

さらにそれらの建物の短辺と揃えてSD3・13・14などの溝が北から東へ16°傾く方向に走っており、これらの遺構も同時に存在していた可能性が高い。この内SD3・14から遺物が出土しており、SD3からは土師質皿(第26図227)、土錘(第31図276)、砥石(第31図286)、小刀(第31図278)のほか、細片として青磁、白磁、越前焼の播鉢(木村編年II 3期=13世紀末~14世紀初頭^①)および甕、瓦質土器、土師質皿、須恵器杯などが出土している。SD14からは卸し皿(第26図230)、須恵器杯身(第26図231)のほか、細片として白磁・瓦質土器、須恵器、土師質皿などが出土している。出土遺物は少ないが、SD3は13世紀末から14世紀初頭に機能していたと推定される。このことから、SB1~4の時期も13世紀末から14世紀初めに属する可能性がある。なお、SB1・2およびSB3・4について各々の前後関係は明らかにすることができなかった。

続いて、2区の掘立柱建物についてみると、SB5は西側が調査区外へ延びる建物であり、今回検出した建物の中では最も大きい5間×2間以上の規模を持つ。一方SB6・7については、いずれも3間×2間の規模を持ち、SB7からSB6へと同一地点に同一規模で建て替えが行われている。SB5は主軸が北から西へ179°傾き、SB6・7は主軸が北から西へ11°傾いており、主軸の傾きに12°の差がある。柱間寸法についても、SB5は2.2m、SB6・7は2.6mと差が認められる。

SB5については、SB5-P17から出土した土師質皿のみで判断せざるを得ないが、この土師質皿はSD22出土土師質皿のI-A類に相当するとみられる。因みにSD22はこの建物の南側を東西に走っており、土師質皿が一括廃棄された状態で出土している。SD22は西に102°傾いており、SB5とは軸がわずかにずれる。このことや他の建物の主軸とのずれについて、SB5は北側を流れるSR2の南岸に沿って建てられており、また、今回検出した建物の中では最も規模が大きいことからSB5の特殊性が反映されたものと考えられる。

一方、SB6・7については、上述したようにSB6-P1から土師質皿が1点出土しているが、胎土・形態ともに特殊なため、時期は不明である。周辺の遺構からみてみると、SB6・7の北側にSD20が北から西へ99°傾く方向に走る。このSD20と共に、SD22もSB6・7の短辺と傾きを揃えており、同時期性がうかがわれる。

以上より、掘立柱建物SB1～7の時期について、SB1～5が13世紀末～14世紀初頭に属し、SB6・7がそれらと同時期になる可能性ある。なお、SB5とSD22の軸のずれや、1・2区間の建物の主軸のずれは、旧地形の制約を受けた結果だと考えられるが、調査面積が限られるため、確証を得ない。

第2節 遺物について

1 SD22出土土師質皿について

SD22に一括廃棄されたとみられる土師質皿について、分類ごとの組成でみると、5種類の形態が主体をなし、他の形態が極少量混ざり込んだ様相であるとみられる。具体的には、最も多いⅡ-A類や、Ⅰ-A・Ⅰ-B・Ⅰ-C・Ⅱ-B類が主体をなし、Ⅰ-D・Ⅰ-E・Ⅰ-F・Ⅱ-C・Ⅱ-D類はわずかである。

Ⅰ-C類はユビオサエによる外面の腰の稜線が明確であり、口縁半ばでくびれて外反するのが特徴である。永平寺町諏訪訪問興行寺遺跡第3・4面出土土師質皿にも同じ形態を持つものが認められる⁽²⁾。なお、14世紀に入るとⅠ-C類の口縁がさらに大きく開いた器壁の薄いⅠ-E類が優占する可能性がある。

Ⅰ-A類は12世紀末～13世紀前半に主体をなしていた二段ナデで面取りを施すタイプの系譜を引くものであると考えられ、数量は少ない。大野市新庄遺跡井戸4から出土した大皿は、Ⅰ-A類と共通する点として、底部際から強く立ち上がり、口縁部は1段ナデを施し内湾気味であり、かすかに面取りの痕跡がうかがえるといた点が挙げられる⁽³⁾。Ⅰ-A類と同じく数量が少ないものとして、立ち上がりが直立気味に屈曲し、口縁が真上に短く伸びるⅠ-F類がある。永平寺町諏訪訪問興行寺遺跡第3・4面出土土師質皿の中にも同じ形態を持つものが出土しているが、こちらも数量はごく僅かであり、特殊である⁽²⁾。

小皿について既観すると、Ⅱ-A類・Ⅱ-B類はともに、前代にみられた面取が形骸化し、ほとんど失われている段階である。Ⅱ-A類は「の」の字ナデ成形の平底を呈した土師質皿で、数量が最も多い。一方、12世紀から続く在地系土師質皿の流れを汲むロクロ系土師質皿は確認していない。しかし、その流れの中で成立したのが平坦な底部を持ち、口縁を上方へツマミ上げたⅡ-D類であると考えられる。

13世紀後半から14世紀中ごろは、北陸の土師質皿が在地色を強める時期である⁽⁴⁾。13世紀後半以降、一般的に小皿は口径8cm前後が主流でより浅くなるといわれている。Ⅱ類の深さもいずれも浅く、口径は7～8cm程度である。灯明皿としての利用が用途として主流になっておらず、調査区全体を通して灯明皿の出土が極端に少ないこともこの時期の様相を表している⁽⁵⁾。

出土土師質皿の中心となるⅠ-C類・およびⅡ-A類は、中川編年のV期（13世紀第3四半期）に属すると考えられる⁽⁶⁾。また共伴遺物を見ると、13世紀後半の所産と考えられる土鍋が一点、同安齋系青磁皿Ⅰ類⁽⁷⁾が1点出土しており、出土土師質皿の年代観を否定するものではない。

以上のことから、SD22出土土師器皿は概ね13世紀後半～14世紀初頃のものとして推定される。

当該期の基礎資料として提示することで、今後の研究の一助となることを期待したい。

2 SE2出土墨書曲物について

1区SE2から8～9世紀と推定される曲物の底板が出土した。片面全面に墨書が認められ、多くが縦書きで文章が書かれていたようであるが、判読できたのは数字のみであった（第32図）。判読できた単語は、下方に横書きで「越州」とあり、そして縦書きの文中に「杉おけ」と読める。また左上には花の絵が描かれているのが観察できる。この墨書曲物には第5章で述べたように切り傷が無数に認められ、俎板として転用されたことがうかがえる。利用の順序としては、墨書がなされた後に俎板として利



第32図 SE2出土墨書曲物



269 (赤外線写真)

269

用されたか、もしくは曲物の底板として使用されたのちに組板に転用されたと考えられる。

第3節 遺跡について

1 舟寄本廟遺跡について

1次調査では古墳時代の土師器高坏の脚部が出土しているが、今回の調査で明らかに古墳時代の遺構・遺物と呼べるものは確認できなかった。このことから、土師器高坏は近隣地域からの流れ込みによるものと考えられる。1次調査の結果、調査区の周辺は湿地が広がっており、調査地周辺のみが微高地を形成している状況が明らかになっている。今回新たに確認したのは、その微高地に13世紀後半から14世紀初めにかけて短期間営まれた集落である。なお、集落を分断するように東西方向に流れるSR1の表層からは須恵器の杯身が出土している。SR1は9世紀には埋没していた可能性が高いことから、中世には1区と2区の間は地続きとなっていたと考えられる。

1区にて古代の可能性のある井戸を1基確認した。掘方より暗文土師器（杯C）が出土している。調査区内には他に古代と断定できる遺構は認められないが、今後周辺の調査が進めば、古代の遺構の広がりをつまえることができる可能性がある。

今回の調査成果の中心となる中世の集落の内容としては、土地を区画していたと考えられる溝が数条検出されており、井戸や水溜樹の他、それらと軸を兼ね揃えて掘立柱建物数棟が確認された。1区では南北溝が南側に集中し、掘立柱数棟と井戸2基および水溜樹1基が1区中央より北側に分布するのに対し、2区では複数条の東西溝によって土地が区画され、溝を挟んで水溜樹1基や1区に比べて規模の大きい掘立柱建物2棟が配置される。1・2区共に溝に限られた空闲地と建物などの遺構が集中する空間とに分けられ、土地を使い分ける明確な意図がうかがえる。

また、集落の範囲としては、現時点では推定の域を出ないものの、調査地内の旧地形は西から東に向かってゆるやかに傾斜することから、調査地より東側に向かって展開していくものと考えられる。

特筆すべき点としては、SD22から土師質皿が一括廃棄された状態で検出したことが挙げられる。北

隣りの掘立柱建物SB5にて饗宴が行われた可能性があるなど何らかの関連がうかがえる。SB5は今回検出した掘立柱建物のなかでは最も規模が大きいことから、通常の民家とは異なった性格を持つ可能性がある。SD22出土土師質皿には、13世紀後半から14世紀前半の土師質皿にみられるような在地化の傾向が認められ、福井県内出土土師質皿の一括資料として一例が追加されることとなった。

2 舟寄築山遺跡について

SD41のみを検出し、遺構埋土からも包含層からも時期決定に耐える遺物が出土しなかった。このため、SD41が南の舟寄本廟遺跡で検出した集落到連なるものかどうかについては断定できない。しかし、舟寄築山遺跡で確認した包含層は、舟寄本廟遺跡の遺構面を覆う包含層と同一層である可能性が高い。

また3区より北側は、1次調査の結果から、長期にわたって低湿地が広がっていたことが明らかになっている。以上のことから、3区周辺が集落の北限であったとみて間違いなであろう。

註

- (1) 福井県埋蔵文化財調査センター 2016 『福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報6 越前使総合調査事業報告書』
- (2) 南洋一郎 1992 『越前・若狭における様相』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
福井県埋蔵文化財調査センター 2008 『福井県埋蔵文化財調査報告第20集 諏訪問興行寺遺跡-国道416号線改良工事に伴う緊急調査-』
- (3) 北陸中世土器研究会 1997 『新庄遺跡』『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』
南洋一郎 1992 『越前・若狭における様相』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- (4) 中井淳史 1999 『北陸における中世前期の土師器-イデオムの観点から-』『中世北陸の石文化1』北陸中世考古学研究会
阿部栄 2007 『福井県における10世紀から14世紀の土師器と陶磁器』『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- (5) 富山正明 1997 『越前国における13-16世紀の土師器編年』『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』北陸中世土器研究会
- (6) 中川佳三 2005 『土師器皿の検討-中世前期を中心として-』『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ(遺物編)』福井県埋蔵文化財調査センター
- (7) 上田秀夫 1982 『14-16世紀の青磁椀の分類』『貿易陶磁研究 第2号』日本貿易陶磁研究会
横田賢次郎・森田勉 1978 『大宰府出土の輸入陶磁器について-形式分類と編年を中心として-』『九州歴史資料館研究論集4』

写 真 图 版



(1) 調査区 遠景(北東から)



(2) 1区 全景(右が北)



(1) 2・3区 全貌(北から)



(2) 1区SB 1 完掘状況(北から)



(3) 1区SB 2 (東から)



(4) 1区SB 3・4 完掘状況(北から)



(1) 2区SB 5 完掘状況(北から)



(2) 2区SB 6・7 完掘状況(北から)